

# 完全主義と選択的注意バイアスとの関連の検討

名古屋大学大学院教育発達科学研究科

坪田 祐基

# 目 次

第1章 問題と目的 .....	4
1.1 はじめに .....	5
1.2 完全主義とは .....	7
1.3 完全主義の多次元性 .....	9
1.4 完全主義者に特有の認知スタイル .....	12
1.5 選択的注意バイアス .....	14
1.6 完全主義研究における選択的注意バイアス .....	15
1.7 完全主義者の選択的注意バイアス研究における問題点 .....	17
1.8 本論文の目的と構成 .....	20
第2章 完全主義と選択的注意バイアスとの関連	
—ドット・プローブ課題を用いて—（研究1） .....	21
2.1 問題と目的 .....	22
2.2 方法 .....	25
2.3 結果 .....	30
2.4 考察 .....	34
第3章 完全主義と対人場面における選択的注意バイアスとの関連（研究2） .....	37
3.1 問題と目的 .....	38
3.2 方法 .....	41
3.3 結果 .....	46
3.4 考察 .....	52
第4章 完全主義と定位・開放困難バイアスとの関連	
—修正ドット・プローブ課題を用いて—（研究3） .....	54
4.1 問題と目的 .....	55
4.2 方法 .....	59
4.3 結果 .....	63
4.4 考察 .....	67
第5章 総合考察 .....	71
5.1 本論文における研究結果のまとめ .....	72

5.2 本論文の意義と今後の課題 .....	73
5.3 おわりに .....	82
引用文献 .....	83
関連文献 .....	89
謝辞 .....	90

# 第1章

## 問題と目的

## 1.1 はじめに

「完全」とは、「すべてそなわっていて、足りないところのないこと。欠点のないこと。すべてに及ぶこと (広辞苑, 2018, p.666)」である。成果や造形物への究極の賛辞や、神仏を形容したりする際に用いられるなど、非常に望ましいものであることは疑いようもない。しかし、完全は究極であるがゆえに、現れることは極めて稀である。簡単に達成できるものではないが、だからこそ、人々はいつか完全な何かを手にしたいと憧れを覚える。自分には決して完全な成果は達成できないと考えるのは卑屈であるが、いつでも完全な成果を達成しなければならないと考えるのは、不合理な信念であると言える。そのため、ものごとにしつかりと取り組み、完全な成果をもたらそうと日々努力し、たとえそのときは上手く行かなかったとしても、次に活かせるように改善の策を講じることによって、より良い成果を目指すというあり方が適切だろう。

ところが、世の中には、あらゆる結果が完全でなければならないと考える人々が存在する。そのような人々にとって、日常のあらゆる物事は完全でなければならず、わずかでも足りないところがあれば、彼ら・彼女らは全て失敗であると考えている。しかし、上述したように、完全は最上の状態であるがゆえに、達成されることは極めて稀である。そのため、皮肉にも、完全であることを目指すことや、欠点を許さないことそのものが、欠点であるというパラドックスを生み出しかねない。たとえば、完全でなければ全て失敗であると考えてると、ほとんどのことを失敗であるにとらえてしまう結果となり、「自分は何をやってもダメだ」と、一種の学習性無力感<sup>1</sup>に陥り、やる気も出なくなってしまう。また、失敗することを恐れるあまり、「挑戦して、もし失敗してしまったら、完全でない結果を経験してしまう」と考え、物事に積極的に取り組めないという結果も生み出される。他にも、完全を目指すあまり、行き過ぎた行為に及ぶことも考えられる。たとえば、成果物のクオリティを高めようとするあまり、ささいな部分に多くの時間と労力をつぎ込み、締め切りを破ったり、他の部分にかかる時間がなくなり、結果として全体のクオリティが下がったり、家庭や健康管理などの他の

---

<sup>1</sup> 学習性無力感とは、「避け難い不快経験を繰り返したために、みずからの行動を無力なものと学習することである (小林, 2005, p.439)。」自らの行動によって不快な結果を避けることができないという非随伴性の認知によって生じる。元々は、Seligman & Maier (1967)によるイヌを対象とした実験によって見出されたが、後に人間においても同様の現象が見られることが明らかとなった。

日常生活に支障をきたしたりする可能性がある。また、痩身願望から、ダイエットに完全を目指せば、適正体重を下回っても、わずかな脂肪が許せず、極端な食事制限によって、摂食障害に陥ることも考えられる。このように、完全であること自体は望ましいことであるにもかかわらず、完全を過度に追求することは、現実の認知や行動を歪め、様々な形で不適応を生み出してしまうのである。

## 1.2 完全主義とは

このような問題は、「完全主義」という用語で概念化されており、学術的にも臨床的にも注目されている。完全主義の定義にはいくつかあるが、Hollender (1965)は、「状況から求められる以上に、自分や他者により良いパフォーマンスを望むこと (p.94)」と定義している。また、Burns (1980)は、完全主義者を「手の届く範囲や理屈を超えて基準が高い人や、達成不可能な目標に向かって衝動的かつ絶え間なく懸命に努力する人、もっぱら生産性や達成の点から自分の価値を測る人 (p.34)」であると定義している。他にも、Frost, Marten, Lahart, & Rosenblate (1990)は、「完全主義は、自分自身の行動についての過度に批判的な評価を行う傾向を生じさせる高いパフォーマンス基準を含む (p.450)」と定義している。さらに、Flett & Hewitt (2002)は、「完全主義とは、完全性への希求であり、完全主義者とは、生活のあらゆる側面で完全でありたいと思う人々である (p.5)」との定義をしている。これらの定義のニュアンスや強調する点は、それぞれ少しずつ異なるが、共通して、「完全」とも言える過度に高い目標を設定することは共通している。

これらの定義のもとで、完全主義は、様々な心理・生理的問題との関連が指摘されている。たとえば、Pacht (1984)は、アルコール依存や、勃起障害、過敏性腸症候群、抑うつ、拒食症、強迫性人格障害、醜形恐怖、潰瘍性結腸炎、ライターズ・ブロック、Type A などと関連があると指摘している。また、偏頭痛や、自殺、退学率との関連も示唆されている (Burns, 1980; Hollender, 1965)。比較的近年でも、抑うつや不安障害、摂食障害、自殺傾向、アルコール依存、心身症などの問題との関連が示されている (Flett, Hewitt, Blankstein, & Mosher, 1991)。さらに、大谷 (2010)が不適応的な認知・行動傾向に関して、実証的・臨床的な報告をまとめており、ネガティブ感情 (Hewitt & Flett, 1991)、自己評価 (Frost & Henderson, 1991)、失敗への傷つきやすさ (Blatt & Zuroff, 1992)、自己実現への不満 (Flett et al., 1991)、抑うつ (Hewitt & Flett, 1990)、摂食障害 (Axtell & Newlon, 1993)、自殺 (Hewitt, Flett, & Turnbull-Donovan, 1992)、人格障害 (Hewitt et al., 1992)、強迫性障害 (Frost & Grows, 1993)、不安障害 (Flett, Hewitt, & Dyck, 1989)、パニック障害 (Straub, 1987)、身体化障害 (Forman, Tosi, & Ruby, 1987)、偏頭痛 (Brewerton & George, 1993)、性機能障害 (Quadland, 1980)、タイプA行動 (Flett, Hewitt, Blankstein, Kirk, & Dynin, 1994)、アルコール依存症 (Pacht, 1984)など、様々なメンタルヘルスの悪化や精神疾患との関連が報告されていることを指摘している。

完全主義は、完全な成果を目指して懸命に努力することから、一見望ましくは見えるもの

の、実際には、多岐にわたるこれらの問題と密接な関連を持つ。そのため、完全主義については、学術的にも、臨床的にも取り組むべき重要な問題である。



## 1.3 完全主義の多次元性

完全主義は、もともと 1 次元の概念として扱われてきた (Burns, 1980)が、研究が進むにつれ、複数の次元によって構成されているという考え方が生じてきた。以降では、志向性の次元と、適応性の次元の観点から、完全主義の多次元性について論じる。

### 完全主義の志向性の次元

Hewitt & Flett (1991)は、完全性を誰に求めるのかといった志向性によって、完全主義を複数の次元からとらえた。これは、個人的要素だけでなく社会的要素が完全主義に関連しているという考え方に基づくものである。この考え方に基づき、Hewitt & Flett (1991)は、完全主義を 3 つに分類した「多次元完全主義尺度 (Multidimensional Perfectionism Scale: MPS)」を作成した。MPS は、完全性を自己に求める「自己志向的完全主義 (self-oriented perfectionism)」、完全性を他者に求める「他者志向的完全主義 (other-oriented perfectionism)」、完全性を他者から求められていると感じる「社会規定的完全主義 (socially prescribed perfectionism)」から構成されていた。Hewitt & Flett (1991)は、これらの 3 つの完全主義と抑うつとの関連を検討した結果、自己志向的完全主義、社会規定的完全主義は抑うつと正の関連があることを見出した。

このように、一般的にイメージされる「完全主義」である自己志向的完全主義とは別の次元のもの (i.e., 他者志向的完全主義, 社会規定的完全主義)が、完全主義研究では想定されている。そのため、一口に「完全主義」と言った場合に、その用語が一般的な自己志向的完全主義を指すのか、他の 2 種類の完全主義を含んだものを指すのかが判然としない。しかし、他者志向的完全主義と社会規定的完全主義は、後に示される Shafran, Cooper, & Fairburn (2002)の論文の中で、不適応的な認知スタイルを軸に概念化された完全主義の定義の中には含まれておらず、これらは完全主義そのものではなく、関連する側面をとらえているに過ぎないと指摘されている。そのため、本研究で取り扱う完全主義は、完全性を自分自身に求める「自己志向的完全主義」であるものとし、以降の「完全主義」という記述は、基本的に自己志向的完全主義を指すものとする。

### 完全主義の適応性の次元

完全主義は、必ずしも不適応的にのみはたらく 1 因子構造を想定できるわけでない。元々、

完全主義は不適応的なパーソナリティ特性として概念化されたが、様々な実証研究によって、完全主義は不適応的な側面ばかりではなく、適応的な側面をも有していることが明らかになっている。このような、完全主義が適応に対して両面性を有するという考え方は、元々、Frost et al. (1990)によって示唆されたことである。Frost et al. (1990)は、Hewitt & Flett (1991)とは別に、完全主義者の考え方や行動によって 6 つの因子からなる“Frost Multidimensional Perfectionism Scale (F-MPS)”を作成した。F-MPS は、「自分に高い基準を設ける傾向 (personal standard)」, 「ミスを恐れる傾向 (concern over mistakes)」, 「自分の行動に漠然とした不安を感じる傾向 (doubting of actions)」, 「秩序正しさを重んじる傾向 (organization)」, 「両親の高い期待 (parental expectations)」, 「両親の厳しい批判 (parental criticism)」から構成されており、この内、自己志向的完全主義に関連していると考えられるのは、はじめの 4 つである。そして、自分に高い基準を設ける傾向は適応的であり、ミスを恐れる傾向と、自分の行動に漠然とした不安を感じる傾向は不適応的であることが示唆され、完全主義は適応・不適応の両側面を有していることが明らかになった。

国内において、完全主義の適応への両面性が議論されるようになったのは、大谷・桜井 (1995)の研究に端を発している。大谷・桜井 (1995)は MPS の日本語版を作成し、Hewitt & Flett (1991)と同様の調査を行った。その結果、自己志向的完全主義は抑うつと負の関連があることが示唆された。これは、自己志向的完全主義と抑うつには正の関連があるという Hewitt & Flett (1991)の結果とは逆のものである。そこで、桜井・大谷 (1997)は、Frost et al. (1990)の F-MPS を参考に、自己志向的完全主義をより構造的な多次元で測定する「多次元自己志向的完全主義尺度 (Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale: MSPS)」を作成した。MSPS は、「完全でありたいという欲求 (完全性欲求)」, 「自分に高い目標を課する傾向 (高目標設定)」, 「ミス (失敗)を過度に気にする傾向 (失敗懸念)」, 「自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向 (行動疑念)」の 4 下位尺度からなっていた。抑うつ傾向・絶望感との関連を検討したところ、完全性欲求は自己志向的完全主義の基本的な特徴として、他の 3 つにも共通する側面ではあるが、抑うつ・絶望感とは関係が見られなかった。一方で、高目標設定は抑うつ・絶望感と負の、失敗懸念・行動疑念は正の関係を持っていた。MSPS が開発されて以降、国内においても、完全主義が不適応的な側面ばかりでなく、適応的な側面を有していると想定する研究が数多く行われている。

MSPS 以外にも、小堀・丹野 (2004)は、Flett, Hewitt, Blankstein, & Gray (1998)が開発した「完全主義認知尺度 (Perfectionism Cognition Inventory: PCI)」の因子構造が安定しない (林,

2001; 石田, 2002)ことから、「自分自身に完全性を求める」と定義される自己志向的完全主義を完全主義スキーマとして位置付け、そこから複数の完全主義の認知が生ずるという構造を想定し、完全主義者に特有な認知を多次元で測定する「多次元完全主義認知尺度 (Multidimensional Perfectionism Cognition Inventory: MPCCI)」を作成した。MPCCI は、「高目標設置」、「ミスへのとらわれ」、「完全性追求」の3下位尺度からなっていた。このうち、高目標設置は「高い目標を設定し追求しようとする認知」と定義され、意欲的に目標に取り組ませたり、成功した側面に注意を向けさせたりするなど、適応的な性質を持つと想定されている。また、ミスへのとらわれは「ミスや失敗に対して自己批判する認知」と定義され、ミスをしていないかと心配させたり、ミスをした際に自分を批判させたりするなど、不適応的な性質を持つと想定されている。さらに、完全性追求は、高目標設置やミスへのとらわれとは別に、強迫性障害や摂食障害に特異的な、衝動的に完全性を求めようとする認知であると想定されている。また、ミスへのとらわれに比べ、完全性追求はポジティブな自動思考などとも弱い正の相関が見られ、不適応的な側面だけでなく、適応的な側面も有している。

このように、先行研究における尺度においても、完全主義は、必ずしも不適応的にのみはたらく1因子構造を想定できるわけではない。元々、完全主義は不適応的なパーソナリティ特性として概念化されたが、様々な実証研究によって、完全主義は不適応的な側面ばかりではなく、適応的な側面を有していることが明らかになった。

## 1.4 完全主義者に特有の認知スタイル

それでは、とりわけ問題となる完全主義者が不適応に陥るプロセスはどのように理解すればよいのだろうか。完全主義から不適応へのプロセスについての実証的研究はあまり多くない (大谷, 2010)。そんな中、近年注目されているのは、Shafran et al. (2002)の臨床的な観察に基づき、不適応的な完全主義者の特徴を、認知スタイルを中心に記述した論文である。その内容は、以下のようにまとめられる。

完全主義者は、設定した極めて高い基準がそうそう達成されないにもかかわらず、達成の追求に過度に依存する。この達成の追求を維持させる要因としては、以下のものが挙げられている。知覚した失敗を自己批判と自分自身へのネガティブなイメージに関連付ける「病的なまでの失敗恐怖」。破った場合には強い罪悪感と自己批判を生じる厳しいルールとして設定される「完全な成功・完全な失敗のみの二分法的な目標設定」。結果だけでなく、過程においても目標に反することがなかったかチェックする「パフォーマンス追求・達成に対するバイアスのかかった評価」。一度失敗すれば、自分は人として価値がないと評価する「目標不達成時の自己批判」。そして、失敗ばかりを選択的に拾い上げて注目する「失敗への選択的注意バイアス」である。すなわち、完全主義者は、自らが設定した過度に高い二分法的な基準に照らし、結果だけでなく過程も含めた様々な失敗を拾い上げ、多少の成功は無視する。そして、知覚された失敗を引き金に、「自分は価値のない人間だ」といった強い自己批判を繰り返す。そして、それを取り戻すように更に高い基準を設定し、その追求に依存することによって、完全主義傾向を維持し、様々な問題を呈することになる。

このように、Shafran et al. (2002)は不適応的な完全主義者の認知スタイルについて、そのプロセスを詳細に論じている。上述のように、完全主義は様々な心理・生理的問題との関連がある一方で、MSPSの高目標設定や、MPCIの高目標設置といった適応的な側面も有している。そのため、臨床的介入によって、単に完全主義パーソナリティを変えることは、完全主義の適応的な側面をもなくしてしまうことになる。また、そもそも、安定的な完全主義パーソナリティを変容させること自体が困難である。そこで、Shafran et al. (2002)が提案するように、不適応的な完全主義者に特有の認知スタイルにアプローチし、不適応に強く関わるプロセスの特徴を明らかにできれば、認知行動療法などの臨床的な介入に示唆を与えることができると考えられる。これにより、完全主義パーソナリティとその適応的な

側面はそのままに、不適応的な認知プロセスを変容させることが可能になると考えられる。

それでは、Shafran et al. (2002)が挙げた不適応的な完全主義者の認知スタイルのうち、特に不適応につながると考えられるのはいずれであろうか。上述のように、完全主義者の悪循環の引き金となっているのは、失敗の知覚である。頻繁に失敗を知覚することがなければ、自己批判は生じず、基準を高め続けることもなく、高い基準の追求に依存することもない。そのため、いかに完全主義者が実際に起きている以上の失敗を知覚することになるかを検討することによって、悪循環の生起のプロセスや、そこから抜け出す方策を示唆することができると考えられる。さらに、できごとの何が成功で、何が失敗かを判断する際に関わってくるものとして、高い基準設定と、選択的注意バイアスがあると考えられる。この内、「完全」とも言える高い基準を設定すること自体は、適応的な完全主義者とも共通するもので、桜井・大谷 (1997)や小堀・丹野 (2004)で示唆されたように適応的にはたらく可能性がある。一方で、完全主義者に失敗への選択的注意バイアスが実際に見られるのであるとすれば、たとえ、ある程度の成功を収めたとしても、彼ら・彼女らはそれには目もくれず、失敗したできごとばかりを拾い上げることになる。すなわち、完全主義者は、失敗への選択的注意バイアスによって、実際に経験している成功・失敗の入り混じった客観的な現実から、失敗したできごとやネガティブな側面ばかりを抽出し、客観的なものとは異なる失敗に満ちた主観的な現実を構成する。これにより、客観的な実情よりも多くの失敗を経験していると知覚してしまうことになる。失敗の知覚が、不適応的な完全主義サイクルの引き金となっていることと合わせて考えると、失敗への選択的注意バイアスは、不適応的な完全主義の大きな源泉となっていると考えられる。

## 1.5 選択的注意バイアス

選択的注意バイアスは、完全主義の文脈以外でも、大きな心理的問題をもたらすものとして指摘されている。

たとえば、Beck (1976) は認知を中心に据えた抑うつ理論の中で、選択的注目 (selective abstraction) を抑うつ的な人の認知的特徴として挙げている。抑うつ状態にある人は、客観的にはそれなりにポジティブなできごとが生じていたり、同じできごとでもポジティブな側面があったりするにもかかわらず、それらには目もくれない。彼らは、些細な悪いことやネガティブな側面ばかりを重視し、世界がネガティブなもので溢れかえっているという自分の置かれている環境に対するイメージを再確認し、強化していくのである。

他にも、氏家・高濱 (1994) では、Lazarus & Folkman (1984) がストレスに対する傷つきやすさに信念が及ぼす影響を考察する中で用いた「知覚レンズ(perceptual lense)」という比喻を取り上げている。高い不安を持つ人にとって、このレンズは、自分にとって起こって欲しくないことや要求に合わないことに非常によく焦点化してしまう。その結果、現実が起こっていることの中からネガティブな物事ばかりを拾い上げ、より不安が高まるといった悪循環を生んでしまうのである。

このように、抑うつに陥っている人や知覚レンズを有する人々は、物理的・客観的な現実をありのままに知覚するのではなく、選択的注意バイアスによって、あるできごとや側面のみを抽出した主観的な現実の中で生きているのである。選択的注意バイアスのありかたがネガティブなことや失敗にばかり向けられたものであるなら、現実是不当に悪く歪められ、不適応を導く大きなリスクになりうる。

## 1.6 完全主義研究における選択的注意バイアス

以上のことから、完全主義者の適応を考えるためには、選択的注意バイアスについて検討する必要がある。しかし、完全主義と選択的注意バイアスの関連を実証的に扱った研究は少ない。この理由として考えられるのは、選択的注意バイアスが自動的で、無意識的なものであるという性質 (Mathews, 1990)を有していることである。パーソナリティ変数を扱った研究の中心的な手法である評定尺度を用いた調査法では、精緻に選択的注意バイアスをとらえることは困難であり、このことが選択的注意バイアスを扱った研究が盛んに行われない理由であると考えられる。

評定尺度法を用いた研究としては、Frost et al. (1997)のものがある。Frost et al. (1997)は、F-MPS (Frost et al. 1990)の下位因子のひとつである「ミスを恐れる傾向 (concern over mistakes)」の高低によって、過去5日間に経験した失敗の回数の報告に差異があるかを検討している。その結果、有意な差は見られなかった。一方、失敗への反応や、失敗の深刻さの認知、他者からの失敗への反応に対する懸念、失敗の反芻の程度についてはミスを恐れる傾向の高低によって有意な差が見られた。この結果は、ミスを恐れる傾向の強い完全主義者が、失敗のひとつひとつを深刻に評価していることは測定できているが、実際にそのときに知覚した失敗の回数は回顧法によって測定できなかったためにもたらされた可能性が考えられる。また、過去に経験した失敗の回数の報告では、実際に失敗を多く経験している人と、失敗への選択的注意を行っている人を混同してしまうといった可能性も排除できない。これらのことから、回顧法などの方法では、失敗への選択的注意バイアスの度合いと異なったものを測定している可能性があるという問題が残る。

そのため、完全主義者の選択的注意バイアスを精緻に検討するためには、自己報告ではなく、統制された実験室における認知行動実験パラダイムに基づいた測定を用いることがより適切であると考えられる。

ところが、認知行動実験パラダイムによって完全主義者の選択的注意バイアスを検討した研究はほとんどない。数少ない研究としては、Lundh & Öst (1996)が、対人恐怖症患者に対して、情動ストロープ課題 (emotional Stroop test)を用い、F-MPS の得点と社会的脅威語 (e.g., “foolish”, “worthless”)への選択的注意バイアスとの間に正の相関を見出している。また、Kobori & Tanno (2012)は、同様に情動ストロープ課題を用い、MPS の自己志向的完全主義因子の得点が高い人の方が、低い人よりも失敗関連語 (e.g., 「失敗」, 「不成功」)に対して

選択的注意バイアスを有することを示した。このように、完全主義と選択的注意バイアスとの関連は、数は少ないながらも、認知行動実験パラダイムを用いた研究においても示唆されている。しかし、これらの研究は、いくつかの問題点を有している。



## 1.7 完全主義者の選択的注意バイアス研究における問題点

この節では、完全主義と選択的注意バイアスの関連について、認知行動実験パラダイムを用いた研究の問題点を、課題、刺激語、性差の観点から述べる。

### 課題の問題点

第一に、選択的注意バイアスの測定に用いられている課題が、情動ストループ課題 (Mathews & MacLeod, 1985)に限られている点である。この課題は、ストループ課題 (Stroop, 1935)で見られるストループ効果を利用し、選択的注意バイアスを測定する課題である。元々のストループ課題は、文字意味と文字色が一致した色単語 (e.g., 赤い色で書かれた「赤」という語)や、不一致の色単語 (e.g., 赤い色で書かれた「緑」という語)を呈示し、文字色の回答を求める課題である。この場合、どちらも正答は「赤」になるのであるが、文字意味と文字色が一致した色単語よりも、不一致な色単語の方が、回答が困難になり、反応時間が増大するというストループ効果があらわれる。情動ストループ課題は、刺激語に色単語ではなく、情動的な内容の語を使用し、刺激語に対する注意の度合いを色命名の反応時間によって測定する。そして、中性語よりも情動的な刺激語における回答の際に反応時間が増大する場合には、回答者がその情動的な刺激語に対して選択的注意バイアスを有していると判断される。しかし、選択的注意バイアスを測定する課題として、情動ストループ課題を用いることには、いくつか問題があることが報告されている。たとえば、使用される刺激語が、脅威語などである場合、実験参加者に、余計な感情的な反応 (e.g., 驚き)を引き起こし、回答を抑制させ、結果として反応時間が長くなってしまう (Cloutre, Heimberg, Holt, & Liebowitz, 1992)。他にも、長い反応時間が、選択的注意ではなく、認知的回避 (cognitive avoidance)を反映してしまっている可能性があることも問題である (Ruiter & Brosschot, 1994)。さらに、刺激語に関連するテーマへの没頭でも同様の反応時間の増大が起きてしまう可能性がある (Wells & Matthews, 1994)。これらの問題点は、選択的注意バイアスを回答の遅さによって測定していることに起因している。実験参加者が、情動語の内容に注意バイアスを有する場合にも回答が遅くなるが、驚きや認知的回避、テーマへの没頭といった他の要因でも回答が遅くなり、回答の遅さが正しく選択的注意バイアスを反映しているのか、他の要素を反映しているのかが判然としない。このことから、情動ストループ課題は、選択的注意以外の認知プロセスも混在して測定してしまっている

可能性がある。

### 用いられた刺激語の問題点

第二に、Kobori & Tanno (2012)で用いられている刺激語が、ネガティブな完全主義関連語 (失敗関連語)に限られている点である。上述したように、完全主義は、必ずしも不適応的のみはたらくものではない。たとえば、MSPS では、高目標設定は適応的な側面である一方、失敗懸念や行動疑念は不適応的な側面であると考えられている。また、MPCI では、高目標設定は適応的であり、ミスへのとらわれは不適応的、完全性追求は適応・不適応の両側面を有していることが示唆されている。ネガティブな完全主義関連語 (失敗関連語)への選択的注意バイアスとの関連だけを扱った先行研究は、片手落ちであり、Kobori & Tanno (2012)も、失敗関連語しか扱わなかった点を限界として指摘している。そのため、完全主義の適応・不適応の両側面と、ポジティブな完全主義関連語 (成功関連語)、ネガティブな完全主義関連語 (失敗関連語)の両方に対する選択的注意バイアスとの関連を検討する必要がある。

### 性差に関する問題点

第三に、これらの研究 (i.e., Lundh & Öst, 1996; Kobori & Tanno, 2012)において、性差の検討がなされていない点である。個人の適応や行動、認知に対する完全主義のはたらきは、性別によって異なっていることが、これまでの研究で示されている。たとえば、河村 (2003) は、男性の方が、女性よりも完全主義傾向が高いことを示唆している。また、齋藤・沢崎・今野 (2008)は、完全主義と帰属スタイル、抑うつとの関連を検討した。データ全体について共分散構造分析を行ったところ、「適応的完全主義」が「対人領域の成功場면을内的かつ安定的な原因へ帰属する傾向」を媒介し、「ポジティブ感情」を高めていた。また、「不適応的な完全主義」が「対人領域の失敗場면을内的かつ安定的な原因へ帰属する傾向」を媒介し、「抑うつ」を高めていた。しかし、多母集団分析を行ったところ、女性では同様の関係が見られたが、男性では、「適応的完全主義」から「対人領域の成功場면을内的かつ安定的な原因へ帰属する傾向」へのパスが有意にならず、適応的完全主義と対人領域の成功場面に関する帰属スタイルとの関係が見られなかった。このように、完全主義のはたらきは、性別によって様々な形で異なっている。また、完全主義研究以外の領域では、Osorio, Cohen, Escobar, Salkowski-Bartlett, & Compton (2003)が、神経症傾向と選択的注意バイアスの関連が性別によって異なることを示唆している。そのため、完全主義と選択的注意バイアスの関連について

も，性別によって異なる可能性を検討する必要があると考えられる。

## 1.8 本論文の目的と構成

本論文では、以上の問題点を解決し、完全主義と選択的注意バイアスの関連をより精緻にとらえ、検討することを目的とする。具体的には、ドット・プローブ課題 (MacLeod, Mathews, & Teta, 1986)や修正ドット・プローブ課題 (Rudaizky, Basanovic, & MacLeod, 2014)といった、選択的注意バイアスをとらえるのにより適切な課題を用いる。なお、課題についての詳細は、第2章以降で論じる。また、完全主義の適応的・不適応的な両側面との関連をとらえるために、成功関連語・失敗関連語といったより幅の広い刺激語を用いる。さらに、性別によって完全主義と選択的注意バイアスの関連が異なる可能性についても検討する。

本論文の構成は、以下の通りである。第2章では、研究1として、完全主義と成功関連語・失敗関連語への選択的注意バイアスとの関連を、ドット・プローブ課題を用いて検討する。第3章では、研究2として、より女性に親和的であると考えられる対人場面における成功関連語・失敗関連語への選択的注意バイアスと完全主義との関連を、研究1と同様にドット・プローブ課題を用いて検討する。第4章では、研究3として、選択的注意バイアスを定位バイアス・開放困難バイアスに弁別して測定できる修正ドット・プローブ課題を用いて、完全主義とこれらのバイアスとの関連をより精緻に検討する。最後に、第5章では、これまでの内容を総括し、総合考察として、本論文で明らかにされた結果を整理し、本論文の意義や限界点、今後の課題について議論を行う。

## 第2章

完全主義と選択的注意バイアスとの関連

—ドット・プローブ課題を用いて—（研究 1）

## 2.1 問題と目的

研究1では、第1章で述べた認知行動実験パラダイムによる先行研究の3つの問題点(課題・刺激語・性差)を解決し、より精緻に完全主義と選択的注意バイアスとの関連を検討することを目的とする。具体的には、完全主義パーソナリティとして自己志向的完全主義、そこから生じる認知として、適応的な高目標設置、不適応的なミスへのとらわれ、適応に中立な完全性追求を質問紙によって測定し、それぞれと成功関連語・失敗関連語への選択的注意バイアスとの関連を検討する。

選択的注意バイアスの測定には、先行研究で用いられていた情動スト룹課題の問題点を解決するために、ドット・プローブ課題 (MacLeod et al., 1986)を用いる (Figure 2.1)。この課題は、視覚的に2つの刺激を短い時間対呈示した後、どちらかの刺激が呈示された位置にドットや記号を呈示するものである。実験参加者は、そのドットの位置や記号の形を回答するが、この際に反応時間が測定される。2つの刺激のうち、より注意が向いていた刺激の位置にドットや記号が呈示された場合、回答までの反応時間が短くなる。だが、注意が向いている方とは逆の位置にドットや記号が呈示された場合には、回答までの反応時間が長くなる。このようにして、2つの刺激のうちのどちらに対して選択的注意を行っているのかを測定する。

ドット・プローブ課題は、選択的注意バイアスを測定する課題として、情動スト룹課題に比べていくつかの利点を有する。たとえば、反応の遅れが刺激語への注意を意味する情動スト룹課題とは異なり、刺激に対するより早い反応が、注意が向いていることを示唆するため、反応を遅らせる驚きなどの選択的注意バイアス以外の要素を混同することなく測定することができる。また、ドット・プローブ課題では、1回の試行で2種類のカテゴリ(e.g., 感情語と中性語)からそれぞれ1つずつ刺激が対呈示され、そのどちらに注意が向くのかを測定する。そのため、1回の試行で単一の刺激カテゴリを呈示する情動スト룹課題よりも、ある刺激カテゴリに対する選択的注意バイアスを測定するのにふさわしい (Bögels & Mansell, 2004)。

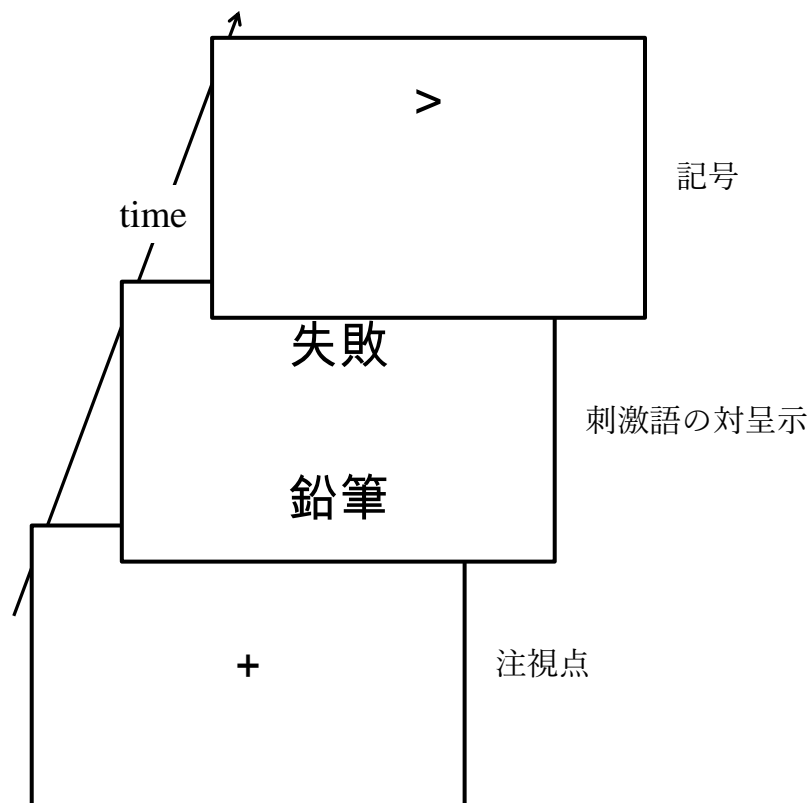


Figure 2.1 ドット・プローブ課題のシーケンス

本研究では、完全主義者のポジティブな完全主義関連語 (成功関連語)とネガティブな完全主義関連語 (失敗関連語)の両方に対する選択的注意バイアスを、ドット・プローブ課題を用いて検討する。また、第1章で述べたように、性別によって完全主義と選択的注意バイアスとの関連が異なる可能性があるため、男女別に分けた分析も行う。

なお、本研究の仮説は以下の通りである。

仮説1: 完全主義パーソナリティ (自己志向的完全主義)は、成功関連語への選択的注意バイアス、ならびに失敗関連語への選択的注意バイアスとの間に正の相関を持つ。

仮説2: 適応的な完全主義の認知である高目標設置は、成功関連語への選択的注意バイアスとの間に正の相関を持つ。

仮説3: 不適応的な完全主義の認知であるミスへのとらわれは、失敗関連語への選択的注意バイアスとの間に正の相関を持つ。

仮説4: 適応に中立的な完全主義の認知である完全性追求は、成功関連語への選択的注意、ならびに失敗関連語への選択的注意バイアスとの間に正の相関を持つ。

なお、これらの仮説は、成功関連語に対する選択的注意バイアスがポジティブな効果を、

失敗関連語に対する選択的注意バイアスがネガティブな効果を持つものであることを前提とし、それぞれが適応的な完全主義、不適応的な完全主義と関連すると想定したものである。失敗に対する選択的注意バイアスは、Shafran et al. (2002)が示した通り、不適応的な完全主義者の認知的特徴である。また、§ 1.4 で議論したように、失敗に対する選択的注意バイアスは完全主義者の不適応の根幹をなしていると考えられるため、ネガティブな効果を持つと想定できる。反対に、成功への選択的注意バイアスは、成功した側面に注意を向け、ポジティブな経験の主観的な頻度を上げることにつながる。このことから、成功に対する選択的注意バイアスはポジティブな効果を持つと考えられる。完全主義の適応的な認知的特徴以降の本研究の考察や、研究 2・3 でも、成功関連語に対する選択的注意バイアスがポジティブで、失敗関連語に対する選択的注意バイアスがネガティブであるという前提のもとで議論する。しかし、文脈によってはこの前提とは異なる場合もありうる。詳しくは、第 5 章の総合考察で改めて検討する。



## 2.2 方法

本研究では、ドット・プローブ課題を用いて、完全主義関連語（成功関連語・失敗関連語）への選択的注意バイアスの度合いを測定する。また、質問紙により、完全主義を測定し、両者の関連を検討する。

### 実施時期

2013 年 10 月から 12 月にかけて実験を実施した。

### 実験参加者

日本語を母語とする大学生 64 名（男性 25 名，女性 39 名）が参加した。平均年齢は 19.72 歳（ $SD = 1.35$ , range 18-24）であった。

### 選択的注意バイアスの測定

**実験課題** 完全主義関連語に対する選択的注意バイアスの測定には、ドット・プローブ課題を用いた。注視点は画面の中央に、刺激語は画面の中心に上下に対呈示された。また、対呈示された 2 つの刺激語のうち、上か下かのいずれかの位置に「<」か「>」の記号が呈示され、記号の形に対応したキーを押すように教示した。なお、「<」とキーボードの“F”のキー、「>」と“J”のキーをそれぞれ対応するものとした。

**呈示時間** 注視点と刺激語は 500ms ずつ呈示され、記号は実験参加者が回答するまで呈示された。また、回答から次の試行までは 1,000ms のインターバルが設けられた。呈示時間については、MacLeod, Soong, Rutherford, & Campbell (2007)を参考に決定した。

**刺激語** 対呈示される刺激語には、成功関連語、失敗関連語、中性語の 3 種類が用いられた。なお、それぞれの刺激語は以下の通りである。

成功関連語：成功，正解，達成，勝利，成就，成果，承認

失敗関連語：失敗，間違い，過ち，不備，しくじり，不成功，過失

中性語：空気，温度，鉛筆，天気，新聞，地図，家具

刺激語の選定については、まず、失敗関連語と中性語を、Kobori & Tanno (2012)が刺激語に使用したものを参考に決定した。次に、選定された失敗関連語を元に、類語辞典（山口，2003）を用い、成功関連語を選定した。選定の際には、心理学専攻の教員 1 名，大学院生 2

名が、内容妥当性が確保されているか、極端に難しい言葉ではないかの確認を行った。なお、言葉の使用頻度を示す一般語彙レベル (松下, 2011)は、成功関連語が 3,000-11,000 語、失敗関連語が 1,000-18,000 語、中性語が 1,000-5,000 語の範囲であった。それぞれの語彙レベルの範囲は、カテゴリ間で重なりを持っているため、著しく使用頻度が異なっていないと考えられる。また、田島・佐藤・橋本・松下・笹尾 (2016)が、日本人大学生を対象に使用頻度 30,000 語レベルで語彙量を測定したところ、天井効果が見られ、一般の日本人大学生にとって、30,000 語レベルでも日常的に理解することが容易であることが示唆されている。そのため、今回使用した刺激語は、日本語を母語とする実験参加者にとって、十分に馴染み深いものであると考えられる。

**呈示条件** 刺激語の対呈示のパターンは、成功関連語と中性語、失敗関連語と中性語、中性語同士のいずれかであった。また、完全主義関連語と中性語の対呈示に関しては、記号が完全主義関連語側に呈示されるcongruent条件と、中性語側に呈示されるincongruent条件が区別された。そのため、「成功-congruent条件」、「成功-incongruent条件」、「失敗-congruent条件」、「失敗-incongruent条件」、「中性条件 (中性語同士の対呈示)」の5条件があった。

**試行数** 5条件それぞれについて56試行、計280試行がランダムに行われた。

## 質問紙尺度

実験参加者は、完全主義の尺度2つについて回答した。

**多次元完全主義尺度** Hewitt & Flett (1991)の作成した“Multidimensional Perfectionism Scale: MPS”の日本語版 (大谷・桜井, 1995)のうち、「自己志向的完全主義因子」の項目を用いた (Table 2.1)。MPSの自己志向的完全主義因子の尺度は15項目、7件法であった。教示文は、「次の文章は、普段のあなたにどのくらいあてはまりますか。『7. 非常に当てはまる』から『1. 全く当てはまらない』までの7つのうち、あなたにいちばんよく当てはまるところの数字を○で囲んでください。」というものであった。なお、各選択枝の説明は、「1. 全く当てはまらない」、「2. ほとんど当てはまらない」、「3. あまり当てはまらない」、「4. どちらでもない」、「5. 少し当てはまる」、「6. かなり当てはまる」、「7. 非常に当てはまる」であった。

**多次元完全主義認知尺度** 小堀・丹野 (2004)の作成した「多次元完全主義認知尺度 (Multidimensional Perfectionism Cognition Inventory: MPCCI)」を用いた (Table 2.2)。MPCCIは、

「高目標設置」，「ミスへのとらわれ」，「完全性追求」の3因子からなり，15項目，4件法であった。教示文は，「みなさんの頭に浮かぶ考えの例を以下に挙げてあります。それぞれの考えを読んで，先週1週間の間に，その考えや似たような考えが，どのくらいの頻度であなたの頭に浮かんできたかを，『4.いつもあった』から『1.全くなかった』までの4つのうちで答えてください。」というものであった。なお，各選択枝の説明は，「1. 全くなかった」，「2. あまりなかった」，「3. たまにあった」，「4. いつもあった」であった。

Table 2.1 研究1で用いた多次元完全主義尺度 (MPS)の項目

---

**【自己志向的完全主義】**

1. することは，完璧にしないと安心できない。
  2. やるなら何でも完璧にやりたい。
  3. 自分の仕事や勉強を完璧にやろうとは思わない。(R)
  4. 完べきでなければならない，とは思わない。(R)
  5. できる限り，完璧であろうと努力する。
  6. やりかけたことはなんでも完璧にやる，ということは大切である。
  7. やると決めたことは何でも最善を尽くそうと思い，努力する。
  8. 自分に対して完璧を求める。
  9. 自分がした仕事や勉強に誤りをみつけたりと不安になる。
  10. 私は完璧な目標をたてる。
  11. いつでも全力でやらなければならない。
  12. やること全部が完璧である必要はない。(R)
  13. 高すぎる目標は持たない。(R)
  14. 私は自分に高い目標を課している。
  15. 学校の勉強や仕事は，いつもうまくやらなければならない。
- 

注) Rは逆転項目を示す。

Table 2.2 研究 1 で用いた多次元完全主義認知尺度 (MPCI) の項目

---

**【高目標設置】**

2. 基準が高いほど、自分のためになるだろう。
3. 最高の水準を目指そう。
6. 目標は高いほどやりがいがある。
8. 目標は高ければ高いほどいい。
14. 高い基準を自分に課することが大切だ。

**【ミスへのとらわれ】**

1. ミスがあると、自分が惨めに思えてくる。
9. ここでまちがえるなんて情けない。
10. ミスがあると、自分を責めたくなる。
13. うまくできなければ、人並み以下ということだ。
15. 失敗したら、私の価値は下がるだろう。

**【完全性追求】**

4. わたしは“完べき”でなければならない。
  5. “完べきにやること”に意味がある。
  7. 完べきにやらなければ、どうしても気がすまない。
  11. 不完全ではいけない。
  12. 完べきにやらなければ安心できない。
- 

## 手続き

実験参加者はドット・プローブ課題についての説明を受けた後、練習試行を 10 試行行った。練習試行の刺激語は、本試行への影響を避けるために、1 から 7 の数字がランダムに対呈された。その後、本試行が 2 つのセッションに分けて実施された。前半のセッションと後半のセッションではそれぞれ 140 試行が行われ、セッションの間には 1 分間の休憩が設けられた。ドット・プローブ課題終了後、実験参加者は、質問紙に回答した。

## 装置

実験ではパナソニック社のノートパソコンが用いられた。このパソコンは、12.1 型ワイド TFT カラー液晶のモニター (1,600×900 ドット, リフレッシュレート 60Hz) と、通常の

QWERTY 配列のキーボードを備えていた。実験参加者とモニターとの距離、ならびに対呈示される刺激語間の距離は、中村・守谷・平石・長谷川 (2011)を参考にし、画面の中央から、刺激語の中心までの視角がおおよそ  $7^{\circ}$  になるように調整された。

ドット・プローブ課題の作成・呈示には、Millisecond 社の Inquisit 4 が用いられた。

## 2.3 結果

### 質問紙尺度に関する結果

質問紙によって測定した完全主義の各下位尺度の合計値を下位尺度得点とし (MPS の自己志向的完全主義は 15-105 点, MPCI の 3 下位尺度は 5-20 点), 下位尺度ごとの平均値と標準偏差, Cronbach の  $\alpha$  係数をデータ全体について, ならびに男女別に算出した。その結果を Table 2.3 に示した。また, Cronbach の  $\alpha$  係数は, .68-.92 の範囲であった。女性のミスへのとらわれの  $\alpha$  係数は, .68 とあまり高くないが, 本研究では, 男女別での分析を行ったため, 男女で同じ質問項目を用い, 比較可能性を保つ必要があった。そのため, 既存の 5 項目をそのまま用いた。

Table 2.3 完全主義の各下位尺度得点の基本統計量

		全体 ( $n=64$ )			男性 ( $n=25$ )			女性 ( $n=39$ )		
		$M$	$SD$	$\alpha$	$M$	$SD$	$\alpha$	$M$	$SD$	$\alpha$
MPS	自己志向的完全主義	65.92	12.27	.89	65.52	14.58	.92	66.2	10.73	.86
	高目標設置	14.03	2.94	.81	14.52	3.34	.88	13.72	2.65	.76
MPCI	ミスへのとらわれ	12.89	2.71	.71	12.28	2.81	.74	13.28	2.61	.68
	完全性追求	11.39	3.56	.89	11.16	3.75	.90	11.54	3.47	.88

注)  $M$  は平均値,  $SD$  は標準偏差,  $\alpha$  は Cronbach の  $\alpha$  係数を示す。

### ドット・プローブ課題に関する結果

**反応時間データの処理** 最初に, ドット・プローブ課題によって, 各実験参加者について得られた 280 試行分の反応時間データのうち, 誤答を分析から除外した。次に, 大友・上野・松嶋・丹野 (2008) を参考にし, 実験参加者ごとに, 各条件の反応時間の平均値 $\pm 3SD$  より外にあるデータを外れ値として除外した。平均値 $\pm 3SD$  より外にあるデータが正規分布において出現する確率は約 0.28% であり, 反応時間の外れ値検出の基準としてよく用いられるため, この基準は妥当であると考えられる。

これらの処理を加えた上で, 各実験参加者の各条件の平均反応時間を, その実験参加者の各条件における反応時間の代表値とした。

**平均反応時間の基本統計量** 各実験参加者の各条件の平均反応時間の平均値と標準偏差を, データ全体について, ならびに男女別に算出した。その結果を Table 2.4 に示した。

Table 2.4 各条件における平均反応時間の基本統計量

		全体 ( $n=64$ )		男性 ( $n=25$ )		女性 ( $n=39$ )	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
成功条件	congruent	438.2	52.0	442.2	56.0	435.6	49.8
	incongruent	429.2	47.5	428.4	45.6	429.8	49.2
失敗条件	congruent	434.1	49.2	434.6	50.4	433.9	49.1
	incongruent	430.1	49.4	428.1	47.9	431.5	50.9
中性条件		430.1	49.1	430.8	51.4	429.6	48.2

注) *M* は平均値, *SD* は標準偏差を示す。

**選択的注意バイアスの指標** ドット・プローブ課題の反応時間は、短いほど、選択的注意バイアスの度合いが強いことを示すという性質を持っている。また、人によって全体的に反応が早い人や、遅い人がいるため、単純に完全主義関連語を含む条件の反応時間を比較し、一方の反応時間が短かったとしても、当該条件の刺激語に選択的注意バイアスを有するためなのか、全体的に反応が早いためなのかを弁別できない。これらのことから、反応時間を、そのまま選択的注意バイアスの度合いとして用いても、解釈が難しい。そこで、個人の選択的注意バイアスの度合いを検討するために、中性条件と、それ以外の条件の平均反応時間の比を指標として個人ごとに算出した。たとえば、成功関連語への注意の程度を表す指標は、個人の中性条件の平均反応時間を、個人の成功-congruent 条件の平均反応時間で割ることによって算出された。この指標を、完全主義関連語を含む各 4 条件 (i.e., 成功-congruent 条件, 成功-incongruent 条件, 失敗-congruent 条件, 失敗-incongruent 条件) について、同様に算出した。感情価のない中性語同士を対呈示される中性条件は、その実験参加者の課題の反応時間のベースラインを与えていると考えられる。この指標は、ベースラインとなる中性条件の平均反応時間を分子に置くことによって、値が大きくなるほど、各条件の完全主義関連語への選択的注意バイアスの度合いが強いことを示すため、解釈が容易である。この指標の大きさは、congruent 条件の場合には、その完全主義関連語に対する注意の程度を、incongruent 条件の場合には、認知的な回避の程度を表す。また、この指標は、1 より大きい場合には、中性条件よりも当該条件での反応時間が短いことを示

し、1 より小さい場合には、中性条件よりも当該条件での反応時間が長いことを示す。なお、以降は記述の利便性を考慮し、成功関連語に“S”，失敗関連語に“F”，congruent に“C”，incongruent に“I”を割り当て、アルファベット二文字のコードで、この指標を表記することとする（e.g., 中性条件の平均反応時間を成功-congruent 条件の平均反応時間で割った指標は“SC”）(Table 2.5)。

Table 2.5 選択的注意バイアスの指標コード

完全主義関連語 回答記号の位置 指標コード		
成功関連語 (S)	congruent	SC
	incongruent	SI
失敗関連語 (F)	congruent	FC
	incongruent	FI

選択的注意バイアスの指標の平均値と標準偏差をデータ全体、ならびに男女別に算出した。その結果を Table 2.6 に示した。

Table 2.6 選択的注意バイアスの指標の基本統計量

		全体 ( $n=64$ )		男性 ( $n=25$ )		女性 ( $n=39$ )	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
成功関連語	SC	0.997	0.025	0.995	0.025	0.997	0.025
	SI	1.002	0.029	1.004	0.027	1.000	0.030
失敗関連語	FC	0.990	0.033	0.988	0.042	0.990	0.025
	FI	1.001	0.027	1.007	0.028	0.997	0.025

注) *M* は平均値, *SD* は標準偏差を示す。

#### 完全主義と選択的注意バイアスとの相関

質問紙で測定した完全主義の各下位尺度得点と、ドット・プローブ課題で測定した選択的注意バイアスの指標の間の Pearson の積率相関係数をデータ全体について算出した。ま



た、男女別にも同様に算出し、その結果を Table 2.7 に示した。データ全体については、完全性追求と FC との間に 5%水準で有意な弱い正の相関 ( $r = .26$ )が見られた。男性については、自己志向的完全主義と FC との間に中程度の正の相関 ( $r = .40$ )が、高目標設置と FC との間に中程度の正の相関 ( $r = .41$ )が、完全性追求と SC との間に中程度の正の相関 ( $r = .47$ )、FC との間に中程度の正の相関 ( $r = .43$ )が見られた。いずれも、5%水準で有意であった。また、女性については、ミスへのとらわれと SC との間に 5%水準で有意な弱い正の相関 ( $r = .32$ )が見られた。

Table 2.7 完全主義の各下位尺度得点と選択的注意バイアスの指標との相関係数

		SC	SI	FC	FI
全体	MPS 自己志向的完全主義	.10 [-.15, .34]	.05 [-.20, .29]	.21 [-.04, .44]	.13 [-.12, .37]
	高目標設置	.09 [-.16, .32]	.14 [-.11, .37]	.23 [-.02, .45]	.24 [-.01, .46]
	MPCI ミスへのとらわれ	.14 [-.11, .37]	.03 [-.21, .28]	.17 [-.08, .40]	.07 [-.18, .31]
	完全性追求	.13 [-.12, .36]	-.03 [-.27, .22]	.26* [.01, .47]	.06 [-.19, .30]
男性	MPS 自己志向的完全主義	.34 [-.06, .65]	.15 [-.26, .52]	.40* [.01, .69]	.16 [-.25, .53]
	高目標設置	.39 [.00, .68]	.29 [-.11, .62]	.41* [.01, .69]	.28 [-.13, .61]
	MPCI ミスへのとらわれ	-.14 [-.51, .27]	-.30 [-.62, .11]	.26 [-.15, .60]	.04 [-.36, .43]
	完全性追求	.47* [.10, .73]	.11 [-.29, .49]	.43* [.04, .70]	.24 [-.17, .58]
女性	MPS 自己志向的完全主義	-.10 [-.40, .22]	-.03 [-.34, .29]	-.10 [-.37, .26]	.12 [-.20, .42]
	高目標設置	-.14 [-.44, .18]	.01 [-.30, .33]	.02 [-.30, .33]	.17 [-.16, .46]
	MPCI ミスへのとらわれ	.32* [.00, .58]	.26 [-.06, .53]	.06 [-.26, .37]	.16 [-.16, .46]
	完全性追求	-.10 [-.41, .22]	-.11 [-.42, .21]	.08 [-.25, .38]	-.10 [-.37, .26]

注) [ ]内は95%信頼区間を表わす。

\*  $p < .05$

## 2.4 考察

本研究の目的は、認知行動実験パラダイムに則ったドット・プローブ課題を用い、成功関連語と失敗関連語への選択的注意バイアスと、完全主義との関連を検討することであった。

なお、本研究では、男性と女性で人数が異なり、男性では  $r = .39$  でも 5%水準で有意にならないが、女性では、 $r = .36$  でも有意になる。男性と女性で、統一的な考察を行うため、石井 (2014)に基づき、中程度の相関を示す.40 以上の相関係数を実質的な関連があるものとして解釈する。

### 完全主義と選択的注意バイアスとの関連 (全体)

全体のデータでは、MPCI の下位因子である完全性追求と FC との間に弱い正の相関が見られた他には、選択的注意バイアスの指標と完全主義の各下位尺度の間には有意な相関が見られなかった。

完全性追求と FC の間の相関は、5%水準で有意ではあるものの、 $r = .26$  と弱いものであった。そのため、選択的注意バイアスと完全主義との関連が十分見られるとは言えず、全体のデータでは仮説 1～仮説 4 は支持されなかった。

この結果は、完全主義と選択的注意バイアスの関連が、後述するように性別によって大きく異なっているにも関わらず、両者のデータを合わせて分析することによって相関が弱められたためにもたらされたものであると考えられる。

### 完全主義と選択的注意バイアスとの関連 (男性)

男女別でデータを分割し、選択的注意バイアスの指標と完全主義の各下位尺度との相関分析を行ったところ、男性と女性で異なる相関行列のパターンが見られた。

男性については、完全主義の各下位尺度得点と成功関連語や失敗関連語への選択的注意バイアスの度合いとが関連しており、以下のような様相であった。

**自己志向的完全主義との関連** MPS の下位因子である自己志向的完全主義と FC との間には中程度の正の相関が見られた。自己志向的完全主義が高いと、失敗関連語への選択的注意を行うことが示唆された。この結果は、仮説 1 を部分的に支持するものであった。すなわち、男性の実験参加者においては、完全主義傾向の高低が、失敗関連語への選択的注意バイアスの度合いと関連していると考えられる。

**高目標設置との関連** MPCCI の下位因子である高目標設置と FC との間に中程度の正の相関が見られた。そのため、仮説 2 は支持されなかった。高目標設置は、「高い目標を設定し追求しようとする認知」であり、「成功した側面に注意を向けさせる」ものとして、小堀・丹野 (2004)の研究で概念化されている。だが、本研究の結果では、高目標設置は、むしろ失敗関連語に対する選択的注意を促すものであることが示された。このことは、設定される高い目標が緊張や強迫的な努力の繰り返しを招き (小堀・丹野, 2004), 失敗を注意深くモニタリングすることを反映した結果であると考えられる。すなわち、自分自身をあえて追い込むような高い目標によって、完全主義者は失敗に目を向ける可能性が示唆された。

**ミスへのとらわれとの関連** MPCCI の下位因子であるミスへのとらわれと選択的注意バイアスの間には有意な相関は見られなかった。そのため、仮説 3 は支持されなかった。ミスへのとらわれは、男性において成功や失敗への選択的注意を促進しないことが示唆された。ミスへのとらわれは小堀・丹野 (2004)において抑うつと関連があると指摘されている。だが、今回の結果から、高いミスへのとらわれを持つ人が抑うつに陥るのは、選択的注意を行うからではなく、小堀・丹野 (2004)でも関連が指摘されている自動思考などの別のプロセスがはたらいている可能性が示唆された。

**完全性追求との関連** MPCCI の下位因子である完全性追求と SC, FC との間には中程度の正の相関が見られた。そのため、仮説 4 は部分的に支持された。完全性追求は、摂食障害や強迫性障害に特異な「完全性を衝動的に追求する認知」として概念化がなされている (小堀・丹野, 2004)。そのため、その尺度項目の内容は「わたしは“完べき”でなければならない」、「不完全ではいけない」など、完全でない自分を許せない、完全でなければいけない、というようなものになっている。つまり、失敗していないかを注意深くモニタリングするとともに、成功への志向性もともなっているのである。そのため、成功関連語と失敗関連語の両方に、選択的注意を行う傾向が見られたと考えられる。

### **完全主義と選択的注意バイアスとの関連 (女性)**

女性のみのデータでは、MPCCIの下位因子であるミスへのとらわれとSCとの間にのみ、弱い正の相関が見られた。だが、相関はそれほど強いものではなく、女性の完全主義傾向は、選択的注意バイアスとあまり強く関連していない可能性が示唆された。そのため、女性のデータに関しては、仮説1～仮説4は支持されなかった。

## 完全主義と選択的注意バイアスとの関連の性差

本研究では、男性のみのデータでは自己志向的完全主義とFCの間、高目標設置とFCの間、完全性追求とSC、FCの間に関連が見られたが、女性では完全主義と選択的注意バイアスとの間に強い関連は見られなかった。そのため、完全主義と選択的注意バイアスとの関連が性別によって異なることが示唆された。特に、男性においてのみ完全主義と選択的注意バイアスとの間に関連が見られるといった結果が得られたことについては、今回用いた刺激語がとりわけ「達成」、「成果」などの課題場面を連想させるものであったことが大きな要因として考えられる。男性の完全主義者にとって、課題場面における「成功」or「失敗」という物事は、そのままポジティブ、ネガティブな価値に直結するものであり、それらに対して男性が過敏に選択的注意を行うことが示唆された。一方、女性にとって、課題場面において成功することは、必ずしも素直にポジティブな意味を持つわけではない。たとえば、「成功恐怖」は競争や成功に伴う負の感情であり、女性特有の性役割に由来するものであると考えられてきた。女性は、成功を求める反面、成功への懸命な努力によって、競争的、攻撃的であるとみなされ、女性らしさを失い社会的に拒絶されるのではないかと懸念する。この懸念が葛藤と不安を呼び起こし、成功を望むと同時に成功を恐れることになる (Horner, 1968)。このように、課題場面における成功や失敗は、女性にとってより多様な意味を持ちうると考えられる。このことが、女性において完全主義と選択的注意バイアスの関連を十分に見いだせなかった原因のひとつである可能性がある。

## 第3章

完全主義と対人場面における

選択的注意バイアスとの関連（研究 2）

### 3.1 問題と目的

研究1では、完全主義と選択的注意バイアスとの関連を検討した。その結果、男性では関連が見られたが、女性では関連が見られず、両者の関連に性差が見られることが示唆された。しかし、研究1で用いられていた刺激語は、「正解」、「達成」、「間違い」、「過失」といった課題場面に関連しているものが多かった。これらの刺激語が、特に男性に馴染み深いものであるならば、女性の完全主義者が本当に選択的注意バイアスを示さないのか、それとも用いられた刺激語が女性にとって馴染みが浅いためにもたらされた結果なのかが判然としない。たとえば、女性の場合、より社会的、対人的な要素の方が馴染み深く、重要である可能性がある。先行研究において、男性よりも女性の方が対人関係に重点を置いていることが示唆されている。たとえば、Hall (1984)によるメタ分析の結果、他者の非言語的行動の理解力や、表情読み取りの力、表情による表現性、対人関係における親密性などについて、男性よりも女性の方が高いことが示唆された。また、石毛・無藤 (2005)は、中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連を検討し、女子のストレス反応の抑制にはレジリエンスよりもソーシャル・サポートの方が大きな影響を及ぼしていることを示した。さらに、上枝・宮前 (2010)は、社会的スキル尺度の得点が男子よりも女子のほうが高いことを明らかにしている。これらのことから、女性にとって、社会的、対人的場面における成功 (e.g., 新しい友人を作る, 恋人と楽しい時間を過ごす)や失敗 (e.g., 友人とケンカする, 恋人と破局する)の方が馴染み深く、高い感情価を持つと考えられる。

そこで、研究2では、対人場面に関する成功関連語や失敗関連語に対する完全主義者の選択的注意バイアスを、研究1と同様にドット・プローブ課題を用いて検討することを目的とする。

なお、本研究では、研究1で用いた完全主義パーソナリティを測定する多次元完全主義尺度 (MPS) (大谷・桜井, 1995)の自己志向的完全主義因子の項目と、そこから生じる完全主義的な認知を測定する多次元完全主義認知尺度 (MPCI) (小堀・丹野, 2004)に加え、自己志向的完全主義をより多次元的なパーソナリティとして測定する多次元自己志向的完全主義尺度 (MSPS) (桜井・大谷, 1997)を用いる。MSPSは、適応的な高目標設定、不適応的な失敗懸念と行動疑念、適応に影響しない完全性欲求といった下位尺度を備えている。各下位尺度と適応との関係は、先行研究において一貫しており、完全主義の適応性・不適応性を議論する際に解釈が明確になる。これらの尺度を用いることによって、より多様な側面から完全主義パ

パーソナリティや認知を測定し、対人場面における成功・失敗に対する選択的注意バイアスとの関連を検討する。そして、特に研究1で見られなかった女性の完全主義者の選択的注意バイアスを検討する。

本研究の仮説は以下の通りである。なお、以下の仮説1～仮説8は女性についてのものである。一方、男性については、完全主義と対人場面における選択的注意バイアスとの関連は見られないと想定する（仮説9）。

仮説1：完全主義パーソナリティ（自己志向的完全主義）は、対人場面に関する成功関連語への選択的注意バイアス、ならびに失敗関連語への選択的注意バイアスとの間に正の相関を持つ。

仮説2：適応に影響しない側面である完全性欲求は、対人場面に関する成功関連語・失敗関連語への選択的注意バイアスのいずれとも相関を持たない。

仮説3：適応的な側面である高目標設定は、対人場面に関する成功関連語への選択的注意バイアスとの間に正の相関を持つ。

仮説4：不適応的な側面である失敗懸念は、対人場面に関する失敗関連語への選択的注意バイアスとの間に正の相関を持つ。

仮説5：不適応的な側面である行動疑念は、対人場面に関する失敗関連語への選択的注意バイアスとの間に正の相関を持つ。

仮説6：適応的な完全主義の認知である高目標設置は、対人場面に関する成功関連語への選択的注意バイアスとの間に正の相関を持つ。

仮説7：不適応的な完全主義の認知であるミスへのとらわれは、対人場面に関する失敗関連語への選択的注意バイアスとの間に正の相関を持つ。

仮説8：適応に中立的な完全主義の認知である完全性追求は、対人場面に関する成功関連語への選択的注意バイアス、ならびに失敗関連語への選択的注意バイアスとの間に正の相関を持つ。

仮説9：男性の完全主義と対人場面に関する成功関連語・失敗関連語への選択的注意バイアスは関連を持たない。

仮説1～仮説8は、研究1の仮説と同様に、完全主義の適応的な側面は成功関連語への選択的注意バイアスと、不適応的な側面は失敗関連語への選択的注意バイアスが見られるという理論的な想定のもとに立てられたものである。研究1の結果では、必ずしも、男性において、完全主義の適応的な側面（高目標設置）と成功関連語への選択的注意バイアスとの関

連があったり、不適応的な側面（ミスへのとらわれ）と失敗関連語への選択的注意バイアスとの関連があったりしたわけではない。しかし、研究２では、研究１で用いた課題場面に関連した刺激語ではなく、対人場面に関連した刺激語を用いる他、女性の完全主義者の選択的注意バイアスを中心に検討を行う。そのため、男性で見られた完全主義と選択的注意バイアスとの関連とは異なる様相が見られる可能性が高いと考えられる。

仮説９は、研究１で女性にとって馴染みが浅いと考えられる課題場面における選択的注意バイアスと完全主義との関連が見られなかったことから、男性にとって馴染みが浅いと考えられる対人場面における選択的注意バイアスについても、同様に完全主義との関連が見られないと想定したものである。



## 3.2 方法

本研究では、ドット・プローブ課題を用いて、対人場面完全主義関連語（対人成功関連語，対人失敗関連語）への選択的注意バイアスの度合いを測定する。また，質問紙により，完全主義を測定し，両者の関連を検討する。

### 実施時期

2015 年 7 月から 12 月にかけて実験を実施した。

### 実験参加者

日本語を母語とする大学生 100 名（男性 50 名，女性 50 名）が参加した。平均年齢は 19.02 歳（ $SD = 1.04$ , range 18-22）であった。

### 選択的注意バイアスの測定

**実験課題** 対人場面完全主義関連語に対する選択的注意バイアスの測定には，研究 1 と同様に，ドット・プローブ課題を用いた。

**呈示時間** 課題では，研究 1 と同様に注視点と刺激語は 500ms ずつ呈示され，記号は実験参加者が回答するまで呈示された。また，回答から次の試行までは 1,000ms のインターバルが設けられた。

**刺激語** 対呈示される刺激語には，対人成功関連語，対人失敗関連語，中性語の 3 種類が用いられた。なお，それぞれの刺激語は以下の通りである。

対人成功関連語：和解，円満，友好，親密

対人失敗関連語：絶縁，決裂，対立，不和

中性語：電卓，鉛筆，天気，新聞

刺激語の選定については，対人成功関連語と対人失敗関連語は，類語辞典（山口，2003）を用いて選定した。また，中性語は，研究 1 で使用したものを参考に決定した。選定の際には，心理学専攻の教員 1 名，大学院生 2 名が，内容妥当性が確保されているか，極端に難しい言葉ではないかの確認を行った。なお，言葉の使用頻度を示す一般語彙レベル（松下，2011）は，対人成功関連語が 7,000-11,000 語，失敗関連語が 4,000-24,000 語，中性語が 1,000-14,000 語の範囲であった。研究 1 と同様に，それぞれの語彙レベルの範囲は，カテゴリ間で

重なりを持っており、使用頻度 30,000 語レベルの範囲内である。そのため、カテゴリ間で著しく日常での使用頻度は異なっておらず、日本語を母語とする実験参加者にとって、十分に馴染み深いものであると考えられる。

**呈示条件** 刺激語の対呈示のパターンは、対人場面完全主義関連語 (対人成功関連語, 対人失敗関連語) と中性語, 中性語同士のいずれかであった。また, 対人場面完全主義関連語と中性語の対呈示に関しては, 記号が対人場面完全主義関連語側に呈示される congruent 条件と, 中性語側に呈示される incongruent 条件が区別された。そのため, 「対人成功-congruent 条件」, 「対人成功-incongruent 条件」, 「対人失敗-congruent 条件」, 「対人失敗-incongruent 条件」, 「中性条件 (中性語同士の対呈示)」の 5 条件があった。

**試行数** 5 条件それぞれについて 32 試行, 計 160 試行がランダムに行われた。

## 質問紙尺度

実験参加者は, 完全主義の尺度 3 つについて回答した。

**多次元完全主義尺度** Hewitt & Flett (1991) が作成した “Multidimensional Perfectionism Scale: MPS” の日本語版 (大谷・桜井, 1995) のうち, 「自己志向的完全主義因子」の項目を用いた (Table 3.1)。MPS の自己志向的完全主義因子の尺度は 15 項目, 7 件法であった。教示文は, 「次の文章は, 普段のあなたにどのくらいあてはまりますか。『7. 非常に当てはまる』から『1. 全く当てはまらない』までの 7 つのうち, あなたにいちばんよくあてはまるところの数字を○で囲んでください。」というものであった。なお, 各選択枝の説明は, 「1. 全くあてはまらない」, 「2. ほとんどあてはまらない」, 「3. あまりあてはまらない」, 「4. どちらでもない」, 「5. 少しあてはまる」, 「6. かなりあてはまる」, 「7. 非常にあてはまる」であった。

**多次元自己志向的完全主義尺度** 桜井・大谷 (1997) が作成した「多次元自己志向的完全主義尺度 (Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale: MSPS)」を用いた (Table 3.2)。MSPS は「完全性欲求」, 「高目標設定」, 「失敗懸念」, 「行動疑念」の 4 因子からなり, 20 項目, 6 件法であった。教示文は, 「次の文章は, 普段のあなたにどのくらいあてはまりますか。『6. 非常に当てはまる』から『1. 全く当てはまらない』までの 6 つのうち, あなたにいちばんよくあてはまるところの数字を○で囲んでください。」というものであった。なお, 各選択枝の説明は, 「1. 全くあてはまらない」, 「2. ほとんどあてはまらない」, 「3. あまりあてはまらない」, 「4. 少しあてはまる」, 「5. かなりあては

まる」，「6. 非常にあてはまる」であった。

**多次元完全主義認知尺度** 小堀・丹野 (2004)が作成した「多次元完全主義認知尺度 (Multidimensional Perfectionism Cognition Inventory: MPCCI)」を用いた (Table 3.3)。MPCCIは，「高目標設置」，「ミスへのとらわれ」，「完全性追求」の3因子からなり，15項目，4件法であった。教示文は，「みなさんの頭に浮かぶ考えの例を以下に挙げてあります。それぞれの考えを読んで，先週1週間の間に，その考えや似たような考えが，どのくらいの頻度であなたの頭に浮かんできたかを，『4.いつもあった』から『1. 全くなかった』までの4つのうちで答えてください。」というものであった。なお，各選択枝の説明は，「1. 全くなかった」，「2. あまりなかった」，「3. たまにあった」，「4. いつもあった」であった。

Table 3.1 研究2で用いた多次元完全主義尺度 (MPS)の項目

---

【自己志向的完全主義】

1. することは，完璧にしないと安心できない。
  2. やるなら何でも完璧にやりたい。
  3. 自分の仕事や勉強を完璧にやろうとは思わない。(R)
  4. 完べきでなければならない，とは思わない。(R)
  5. できる限り，完璧であろうと努力する。
  6. やりかけたことはなんでも完璧にやる，ということは大切である。
  7. やると決めたことは何でも最善を尽くそうと思い，努力する。
  8. 自分に対して完璧を求める。
  9. 自分がした仕事や勉強に誤りをみつけたりすると不安になる。
  10. 私は完璧な目標をたてる。
  11. いつでも全力でやらなければならない。
  12. やること全部が完璧である必要はない。(R)
  13. 高すぎる目標は持たない。(R)
  14. 私は自分に高い目標を課している。
  15. 学校の勉強や仕事は，いつもうまくやらなければならない。
- 

注) Rは逆転項目を示す。

Table 3.2 研究2で用いた多次元自己志向的完全主義尺度 (MSPS)の項目

---

**【完全性欲求】**

- 5. どんなことでも完璧にやり遂げることが私のモットーである。
- 9. 物事は常にうまくできていないと気がすまない。
- 13. 中途半端な出来では我慢できない。
- 16. 出来る限り、完璧であろうと努力する。
- 20. やるべきことは完璧にやらなければならない。

**【高目標設定】**

- 1. いつも、周りの人より高い目標をもとうと思う。
- 4. 何事においても最高の水準を目指している。
- 7. 高い目標を持つほうが、自分のためになると思う。
- 11. 簡単な課題ばかり選んでいては、だめな人間になる。
- 14. 自分の能力を最大限に引き出すような理想を持つべきである。

**【失敗懸念】**

- 3. “失敗は成功のもと”などとは考えられない。
- 6. ささいな失敗でも、周りの人からの評価は下がるだろう。
- 10. 人前で失敗することなど、とんでもないことだ。
- 17. 少しでもミスがあれば、完全に失敗したのも同然である。
- 19. 完璧にできなければ、成功とはいわない。

**【行動疑念】**

- 2. 注意深くやった仕事でも、欠点があるような気がして心配になる。
  - 8. 何かをやり残しているようで、不安になることがある。
  - 12. 納得できる仕事をするには、人一倍時間がかかる。
  - 15. 念には念を入れる方である。
  - 18. 戸締まりや火のしまつなどは、何回か確かめないと不安である。
-

Table 3.3 研究 2 で用いた多次元完全主義認知尺度 (MPCI)の項目

---

【高目標設置】

- 2. 基準が高いほど，自分のためになるだろう。
- 3. 最高の水準を目指そう。
- 6. 目標は高いほどやりがいがある。
- 8. 目標は高ければ高いほどいい。
- 14. 高い基準を自分に課することが大切だ。

【ミスへのとらわれ】

- 1. ミスがあると，自分が惨めに思えてくる。
- 9. ここでまちがえるなんて情けない。
- 10. ミスがあると，自分を責めたくなる。
- 13. うまくできなければ，人並み以下ということだ。
- 15. 失敗したら，私の価値は下がるだろう。

【完全性追求】

- 4. わたしは“完べき”でなければならない。
  - 5. “完べきにやること”に意味がある。
  - 7. 完べきにやらなければ，どうしても気がすまない。
  - 11. 不完全ではいけない。
  - 12. 完べきにやらなければ安心できない。
- 

## 手続き

実験参加者はドット・プローブ課題についての説明を受けた後，練習試行を 10 試行行った。練習試行の刺激は，本試行への影響を避けるために，1 から 7 の数字がランダムに対呈示された。その後，本試行が 2 つのセッションに分けて実施された。前半のセッションと後半のセッションではそれぞれ 80 試行が行われ，セッションの間には 1 分間の休憩が設けられた。ドット・プローブ課題終了後，実験参加者は，質問紙に回答した。

## 装置

実験では研究 1 と同じパナソニック社のノートパソコンが用いられた。実験参加者とモニターとの距離，ならびに対呈示される刺激語間の距離は，研究 1 と同様に，画面の中央から，刺激語の中心までの視角がおよそ 7° になるように調整された。

ドット・プローブ課題の作成・呈示には，Millisecond 社の Inquisit 4 が用いられた。

### 3.3 結果

#### 質問紙尺度に関する結果

質問紙によって測定した完全主義の下位尺度ごとに合計値を算出し、下位尺度得点とした (MPS の自己志向的完全主義は 15-105 点, MSPS の 4 下位尺度は 5-30 点, MPCCI の 3 下位尺度は 5-20 点)。下位尺度得点の平均値と標準偏差, Cronbach の  $\alpha$  係数をデータ全体について、ならびに男女別に算出した。その結果を Table 3.4 に示した。なお, Cronbach の  $\alpha$  係数は、女性の MSPS の下位尺度の行動疑念を除くと、.70 以上であり、それらの尺度の信頼性は十分であると考えられる。また、女性の MSPS の下位尺度の行動疑念の Cronbach の  $\alpha$  係数は.68 であり、極端に低いわけではない。男性との比較可能性を保つために、既存の 5 項目をそのまま用いることとした。

Table 3.4 完全主義の各下位尺度得点の基本統計量

		全体 ( $n=100$ )			男性 ( $n=50$ )			女性 ( $n=50$ )		
		$M$	$SD$	$\alpha$	$M$	$SD$	$\alpha$	$M$	$SD$	$\alpha$
MPS	自己志向的完全主義	66.09	13.48	.91	65.70	13.74	.91	66.48	13.34	.92
MSPS	完全性欲求	18.20	4.77	.86	18.10	4.53	.81	18.30	5.03	.91
	高目標設定	19.30	3.90	.78	19.64	4.31	.82	18.96	3.46	.72
	失敗懸念	15.82	4.60	.80	15.76	3.92	.71	15.88	5.24	.85
	行動疑念	21.34	3.87	.70	21.92	3.97	.72	20.76	3.71	.68
	高目標設置	12.53	3.03	.82	13.80	3.13	.82	13.26	2.94	.83
MPCCI	ミスへのとらわれ	13.04	3.09	.79	13.34	3.07	.78	12.74	3.10	.81
	完全性追求	11.54	3.69	.90	11.66	3.65	.88	11.42	3.77	.91

注)  $M$  は平均値,  $SD$  は標準偏差,  $\alpha$  はCronbachの $\alpha$ 係数を示す。

#### ドット・プローブ課題に関する結果

**反応時間データの処理** 研究1と同様に、ドット・プローブ課題によって、各実験参加者について得られた 160 試行分の反応時間データのうち、誤答を分析から除外した。次に、実験参加者ごとに、各条件の反応時間の平均値 $\pm 3SD$ より外にあるデータを外れ値として除外した。これらの処理を加えた上で、各実験参加者の各条件の平均反応時間を、その実験参加者の各条件における反応時間の代表値とした。

**平均反応時間の基本統計量** 各実験参加者の各条件の平均反応時間の平均値と標準偏差を，データ全体について，ならびに男女別に算出した。その結果を Table 3.5 に示した。

Table 3.5 各条件における平均反応時間の基本統計量

		全体 ( $n=100$ )		男性 ( $n=50$ )		女性 ( $n=50$ )	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
対人成功条件	congruent	419.9	60.2	414.9	71.0	424.9	47.3
	incongruent	416.2	56.5	408.2	64.6	424.3	46.3
対人失敗条件	congruent	417.9	57.9	410.4	67.5	425.4	46.0
	incongruent	417.0	59.4	410.2	65.4	423.9	52.5
中性条件		417.0	58.6	410.2	67.0	423.9	48.5

注) *M* は平均値，*SD* は標準偏差を示す。

**選択的注意バイアスの指標** 研究 1 と同様に，個人の選択的注意バイアスの度合いを検討するために，中性条件と，それ以外の条件の平均反応時間の比を指標として用いた。具体的には，各実験参加者について，中性条件の平均反応時間を，対人場面完全主義関連語を含む各 4 条件 (i.e., 対人成功-congruent 条件，対人成功-incongruent 条件，対人失敗-congruent 条件，対人失敗-incongruent 条件) の平均反応時間で割ることによって算出された。なお，以降は記述の利便性を考慮し，対人成功関連語に“SS”，対人失敗関連語に“SF”，congruent に“C”，incongruent に“I”を割り当て，アルファベット 3 文字のコードで，この指標を表記することとする (e.g., 中性条件の平均反応時間を対人成功-congruent 条件の平均反応時間で割った指標は“SSC”)。選択的注意バイアスの指標コードについては，Table 3.6 にまとめる。

Table 3.6 選択的注意バイアスの指標コード

対人場面完全主義関連語	回答記号の位置	指標コード
対人成功関連語 (SS)	congruent	SSC
	incongruent	SSI
対人失敗関連語 (SF)	congruent	SFC
	incongruent	SFI

選択的注意バイアスの指標の平均値と標準偏差をデータ全体について、ならびに男女別に算出し、その結果をTable 3.7に示した。

Table 3.7 選択的注意バイアスの指標の基本統計量

		全体 ( $n=100$ )		男性 ( $n=50$ )		女性 ( $n=50$ )	
		$M$	$SD$	$M$	$SD$	$M$	$SD$
対人成功関連語	SSC	0.994	0.042	0.990	0.043	0.998	0.042
	SSI	1.001	0.037	1.005	0.036	0.999	0.038
対人失敗関連語	SFC	0.998	0.040	1.000	0.033	0.997	0.046
	SFI	1.001	0.038	1.000	0.033	1.002	0.043

注)  $M$  は平均値,  $SD$  は標準偏差を示す。

#### 完全主義と選択的注意バイアスとの相関

質問紙で測定した完全主義の各下位尺度得点と、ドット・プローブ課題で測定した選択的注意バイアスの指標の間の Pearson の積率相関係数をデータ全体について算出し、その結果を Table 3.8 に示した。データ全体については、有意な相関が見られなかった。

また、男女別にも同様に算出し、男性の結果を Table 3.9 に、女性の結果を Table 3.10 に示した。男性については、MSPS の失敗懸念と SSI との間に 5%水準で有意な弱い負の相関 ( $r = -.29$ )が見られた。女性については、有意な相関が見られなかった。



Table 3.8 完全主義の各下位尺度得点と選択的注意バイアスの指標との相関係数 (全体)

		SSC	SSI	SFC	SFI
MPS	自己志向的完全主義	-.09 [-.28, .11]	-.05 [-.25, .14]	-.04 [-.24, .16]	-.06 [-.26, .13]
	完全性欲求	-.04 [-.23, .16]	-.06 [-.26, .14]	-.07 [-.26, .13]	-.10 [-.29, .10]
	高目標設定	-.08 [-.27, .12]	-.01 [-.20, .19]	.04 [-.16, .24]	-.07 [-.26, .13]
MSPS	失敗懸念	-.01 [-.21, .18]	-.09 [-.29, .10]	-.09 [-.29, .10]	-.07 [-.26, .13]
	行動疑念	-.04 [-.23, .16]	-.06 [-.26, .14]	-.07 [-.26, .13]	-.10 [-.29, .10]
	高目標設置	-.09 [-.28, .11]	-.11 [-.30, .09]	-.02 [-.22, .18]	-.11 [-.30, .09]
MPCI	ミスへのとらわれ	-.08 [-.27, .12]	-.13 [-.32, .07]	-.06 [-.25, .14]	-.02 [-.22, .18]
	完全性追求	.01 [-.18, .21]	-.04 [-.23, .16]	.02 [-.18, .21]	-.09 [-.28, .11]

注) [ ]内は95%信頼区間を表わす。

Table 3.9 完全主義の各下位尺度得点と選択的注意バイアスの指標との相関係数 (男性)

		SSC	SSI	SFC	SFI
MPS	自己志向的完全主義	-.25	-.05	-.05	-.07
		[-.49, .03]	[-.33, .23]	[-.32, .23]	[-.34, .21]
MSPS	完全性欲求	-.21	-.12	-.07	-.14
		[-.46, .07]	[-.39, .16]	[-.34, .21]	[-.41, .14]
	高目標設定	-.18	-.03	-.01	.00
		[-.44, .10]	[-.31, .25]	[-.29, .27]	[-.28, .28]
	失敗懸念	-.20	-.29*	-.05	-.27
		[-.45, .08]	[-.53, -.02]	[-.32, .23]	[-.51, .01]
MPCI	行動疑念	-.21	-.12	-.07	-.14
		[-.46, .07]	[-.39, .16]	[-.34, .21]	[-.41, .14]
	高目標設置	-.17	-.04	-.05	-.06
		[-.42, .12]	[-.32, .24]	[-.32, .23]	[-.33, .22]
	ミスへのとらわれ	-.19	-.08	-.03	-.14
		[-.44, .10]	[-.35, .21]	[-.30, .25]	[-.40, .14]
	完全性追求	-.14	-.05	.01	-.07
		[-.40, .15]	[-.32, .23]	[-.27, .29]	[-.34, .21]

注) [ ]内は95%信頼区間を表わす。

\* $p < .05$

Table 3.10 完全主義の各下位尺度得点と選択的注意バイアスの指標との相関係数 (女性)

		SSC	SSI	SFC	SFI
MPS	自己志向的完全主義	.07 [-.21, .34]	-.05 [-.33, .23]	-.03 [-.31, .25]	-.06 [-.33, .22]
	完全性欲求	.12 [-.16, .39]	-.01 [-.29, .27]	-.07 [-.34, .21]	-.07 [-.34, .22]
	高目標設定	.06 [-.22, .34]	.01 [-.27, .28]	.08 [-.20, .35]	-.14 [-.40, .14]
MSPS	失敗懸念	.13 [-.15, .39]	.05 [-.23, .32]	-.12 [-.38, .17]	.04 [-.24, .32]
	行動疑念	.12 [-.16, .39]	-.01 [-.29, .27]	-.07 [-.34, .21]	-.06 [-.34, .22]
	高目標設置	.01 [-.27, .29]	-.19 [-.45, .09]	-.01 [-.28, .27]	-.15 [-.41, .13]
MPCI	ミスへのとらわれ	.05 [-.23, .33]	-.20 [-.46, .08]	-.09 [-.36, .19]	.07 [-.21, .34]
	完全性追求	.17 [-.11, .43]	-.03 [-.31, .25]	.02 [-.26, .30]	-.11 [-.37, .18]

注) [ ]内は95%信頼区間を表わす。

### 3.4 考察

本研究の目的は、ドット・プローブ課題を用い、対人場面成功関連語、対人場面失敗関連語への選択的注意バイアスと、完全主義との関連を検討することであった。

その結果、全体のデータと女性のみデータでは有意な相関が見られなかった。そのため、完全性欲求と選択的注意バイアスは関連しないという仮説 2 は支持されたが、女性の完全主義の各側面と、対人場面に関する成功関連語・失敗関連語への選択的注意バイアスとの関連を想定した仮説 1 ならびに、仮説 3～仮説 8 は支持されなかった。

また、男性のみデータでは、MSPS の失敗懸念と SSI の間に有意な相関が見られた。男性で見られた失敗懸念と SSI の間の負の相関は、失敗を懸念するほど、対人成功関連語に対する認知的な回避をしなくなることを示す。しかし、その相関係数の値 ( $r = -.29$ ) は統計的に有意であるものの、実質的な関連が見られると言えるほど高いものではなかった。そのため、男性の完全主義と対人場面に関する成功関連語・失敗関連語への選択的注意バイアスは関連を持たないことを想定した仮説 9 は支持されたといえよう。

これらのことより、完全主義傾向と対人場面完全主義関連語との関連は、性別にかかわらず見られなかったことになる。このことは、完全主義は、対人場面では成功・失敗のいずれでも選択的注意バイアスと関連を持たないことを示唆するものであった。研究 1 の完全主義と課題場面に関する完全主義関連語への選択的注意バイアスとの関連が、男性でのみ見られた結果と合わせて考えると、男性の完全主義者は、課題場面では選択的注意バイアスを示すが、対人場面では選択的注意バイアスを示さないことが示唆された。一方、女性の完全主義者は、課題場面、対人場面にかかわらず、選択的注意バイアスを有しないことが示唆された。

対人場面において完全主義者の選択的注意バイアスが見られないことについて、完全主義と選択的注意バイアスの関連を実証的に検討した先行研究が少ないため、直接その理由を考察することはできない。だが、第 1 章で述べた完全主義と関連があると指摘された心理・生理的問題を見ると、対人的な問題は報告されていない。このことから、完全主義は対人的な問題よりも、より個人的な問題と強く関連していることを間接的に推察することができる。また、Shafran et al. (2002) は、完全主義が不適応に陥る際に、対人的なプロセスは必要がないと主張しており、今回の結果はそれを支持するものとなっている。しかし、齋藤他 (2008) は、対人領域において、女性では適応的な完全主義が成功場면을内的かつ安

定的に帰属することを導くことがある一方で、男性では同様のはたらきが見られないことを指摘している。そのため、対人領域における完全主義のはたらきの性差は、原因帰属などの選択的注意バイアス以外の要素によって見られる可能性があると考えられる。

## 第4章

完全主義と定位・開放困難バイアスとの関連

—修正ドット・プローブ課題を用いて—（研究 3）

## 4.1 問題と目的

研究 1・2 によって、男性の完全主義者のみが課題場面に関連した成功関連語・失敗関連語に対する選択的注意バイアスを有することが明らかになった。しかし、研究 1・2 や Lundh & Öst (1996) や Kobori & Tanno (2012) といった認知行動実験パラダイムを用いた先行研究が共通して抱える問題がある。それは、注意における定位過程 (対象に注意を向ける過程) と解放過程 (対象から注意を外す過程) を弁別して測定しておらず、両者を混同してしまっていることである。Posner (1980) の空間的注意のモデルでは、注意における定位過程と解放過程は区別され、それぞれ異なる過程であるとされている。また、実際に定位過程は視床枕核、解放過程は下部頭頂葉といった異なる脳部位の活動と関連していることが指摘されている (Posner & Petersen, 1990)。日常場面においても、失敗した物事に注意が向きやすいこと (定位過程における注意バイアス：定位バイアス) と、失敗した物事から注意をそらすことが困難であること (解放過程における注意バイアス：解放困難バイアス) は異なった状態であると考えられる。本来は異なるものである定位バイアスと解放困難バイアスを混同した場合、完全主義と選択的注意バイアスとの関連を適切にとらえられない可能性がある。そのため、定位バイアスと解放困難バイアスを弁別して測定し、その上で完全主義者が持つ選択的注意バイアスが定位過程・解放過程のいずれかに見られるのか、あるいは両方で見られるのかを検討する必要がある。

そこで、本研究では、定位バイアスと解放困難バイアスを弁別して測定できる修正ドット・プローブ課題 (modified dot-probe task) (Rudaizky et al., 2014) を用い (Figure 4.1), 完全主義と定位バイアス・解放困難バイアスとの関連を検討する。

修正ドット・プローブ課題の手続きは、以下の通りである。はじめに画面の左右にある黒い正方形の枠の中のいずれかに、赤色の注視枠が呈示される。実験参加者は、注視枠を見るように教示される。その後、注視枠内に手がかり刺激として赤色の線分が地面と水平、あるいは垂直に呈示され、実験参加者はその方向を記憶する。そして、刺激語として、有意味語と無意味つづりが左右に対呈示される。最後に、標的刺激として、画面の左右いずれかに赤色の線分が、地面と水平、あるいは垂直に呈示される。実験参加者は、先に呈示された手がかり刺激と標的刺激の方向が一致しているかをキー押しで回答し、標的刺激が呈示されてから、回答するまでの反応時間が測定される。この課題では、手がかり刺激を記憶していないと回答ができないため、実験参加者ははじめに、注視枠の方に必ず注意を向けている。そ

して、有意味語が呈示される位置によって、定位バイアスと解放困難バイアスを弁別して測定することが可能である。具体的には、注視枠と反対の位置に有意味語が呈示される条件 (定位条件)では、その有意味語への定位バイアスを持つ場合、標的刺激が有意味語の位置に呈示される場合には反応が早く、反対の位置に呈示される場合には反応が遅くなる。注視枠と同じ位置に有意味語が呈示される条件 (解放条件)では、その有意味語からの解放困難バイアスを持つ実験参加者が、同様の傾向を示す (Grafton, Southworth, Watkins, & MacLeod, 2016)。

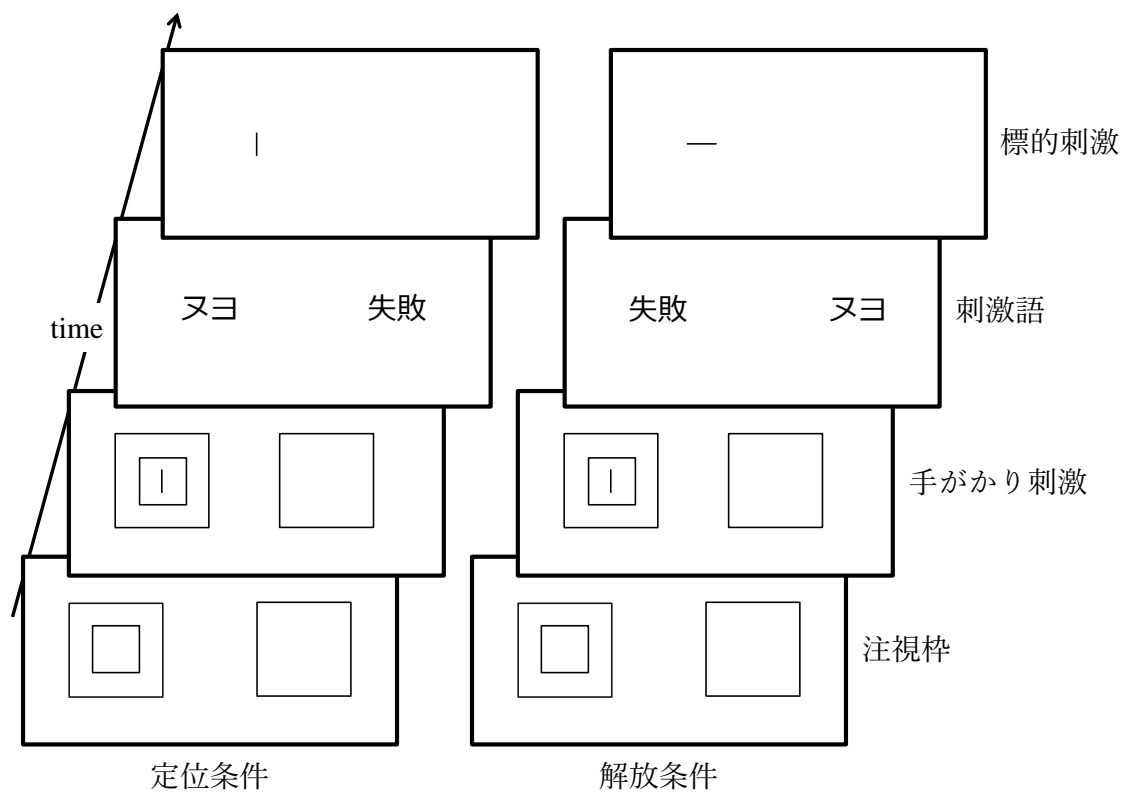


Figure 4.1 修正ドット・プローブ課題のシーケンス

ドット・プローブ課題と修正ドット・プローブ課題の最大の相違点は、はじめにどこに注意を向けているかを明確にできる点である。ドット・プローブ課題では、試行ごとに画面の中心の注視点に注目するように教示されるが、実験参加者が実際にどこを注視しているかははっきりしない。一方、修正ドット・プローブ課題では、注視枠の次に呈示される手がかり刺激に注目し、注意を向け、記憶しないと正答することができない。その上で、注視枠と反対に有意味語を呈示し、そちらに注意が向くかを測定する条件 (定位条件)や、同じ位置



に有意味語を呈示し、そのまま注意し続けるのかを測定する条件 (解放条件)を設けることによって、注意がどのように移り変わるかを試行ごとに明らかにすることができる (Rudaizky et al., 2014)。

本研究では、修正ドット・プローブ課題を用いることによって、定位バイアスと解放困難バイアスを弁別して測定し、成功関連語・失敗関連語に対する定位バイアス・解放困難バイアスと完全主義との関連を検討することを目的とする。

なお、本研究では、完全主義をより多次元的なパーソナリティとして測定する多次元自己思考的完全主義尺度 (MSPS) (桜井・大谷, 1997)を用いる。研究 1 や 2 で用いた多次元完全主義認知尺度 (MPCI) (小堀・丹野, 2004)は、各下位尺度が適応的であるか、不適応的であるかといった点について、想定とは異なる結果が得られていることがある。たとえば、MPCI の高目標設置は、適応的な認知であるという想定がなされているが、実際には設定される高い目標が緊張や強迫的な努力の繰り返しを招くといった、不適応的な成分が指摘されており (小堀・丹野, 2004)、一概に適応的なものであると断定できない。一方、MSPS は、高目標設定が適応的、失敗懸念と行動疑念は不適応的、完全性欲求は適応に影響しないといった結果が先行研究において一貫している。本研究では、下位尺度ごとに適応や不適応との関連がより明確である MSPS のみを用いることによって、完全主義の適応的・不適応的な側面と定位バイアス・解放困難バイアスとの関連を精緻に検討する。

本研究の仮説は以下の通りである。

仮説 1：適応に影響しない側面である完全性欲求は、定位バイアスとも解放困難バイアスとも相関を持たない。

仮説 2：適応的な側面である高目標設定は、成功関連語に対する定位バイアスか解放困難バイアスとの間に正の相関を持つ。

仮説 3：不適応的な側面である失敗懸念は、失敗関連語に対する定位バイアスとの間に正の相関を持つ。

仮説 4：不適応的な側面である行動疑念は、失敗関連語からの解放困難バイアスとの間に正の相関を持つ。

これらの仮説は、完全主義の適応的な側面が適応的であると考えられる選択的注意バイアスと関連し、不適応的な側面が不適応的であると考えられる選択的注意バイアスと関連していると理論的に想定したものである。仮説 1 については、完全性欲求は適応に関連しない側面であるため、選択的注意バイアスとも関連を持たないと想定した。仮説 2 について

は、高目標設定が成功関連語に対する定位・解放困難バイアスの両方ではなく、いずれかとのみ関連を示すと想定した。仮説3については、失敗懸念は、既に経験した失敗を悔やむというよりは、これから行うことによって失敗を経験するのではないかと懸念するという内容のものであるため、失敗関連語からの解放困難バイアスではなく、定位バイアスとの関連を想定した。仮説4については、行動疑念は失敗懸念とは異なり、行動の結果について疑念を抱き、心配するという内容のものであるため、失敗関連語への定位バイアスではなく、解放困難バイアスとの関連を想定した。

なお、本研究でも、研究1や2と同様に、男女別に分けた分析を行う。研究1においては、男性でのみ完全主義と選択的注意バイアスとの関連が見られ、女性では見られなかった。しかし、研究1では、定位バイアスと解放困難バイアスとに弁別することなく混同して測定しており、そのことが問題となって、女性の完全主義傾向と選択的注意バイアスとの関連が見られなかった可能性がある。そのため、定位バイアス・解放困難バイアスを弁別してより精緻に測定し、その上で女性の完全主義傾向との関連を検討することによって、女性の完全主義者が本当に選択的注意バイアスを示さないのか、2種類のバイアスを混同して測定したために関連が見られなかったのかを検討する。

## 4.2 方法

本研究では、修正ドット・プローブ課題を用いて、完全主義関連語（成功関連語・失敗関連語）に対する定位バイアス、解放困難バイアスの度合いを測定する。また、質問紙により、完全主義を測定し、両者の関連を検討する。

### 実施時期

2016 年 10 月から 2017 年 10 月にかけて実験を実施した。

### 実験参加者

日本語を母語とする大学生 75 名（男性 33 名，女性 42 名）が参加した。平均年齢は 19.28 歳（ $SD = 0.91$ , range 18-23）であった。

### 選択的注意の測定

**実験課題** 完全主義関連語に対する定位バイアス・解放困難バイアスの測定には、修正ドット・プローブ課題を用いた。修正ドット・プローブ課題の手続きは、Rudaizky et al. (2014) ならびに Grafton et al. (2016) を参考にした。

各試行では、画面の左右に  $80 \times 80\text{mm}$  の黒線の枠を呈示すると同時に、左右いずれかの黒線の枠内に  $20 \times 20\text{mm}$  の赤線の注視枠を 1,000ms 呈示した。なお、黒線の枠、ならびに注視枠の中心は、画面の中心から、左右にそれぞれ 115mm 離れた位置に呈示された。次に、注視枠内の中央に手がかり刺激として 5mm の赤色の線分を 200ms 呈示した。そして、黒線の枠、注視枠、手がかり刺激を消去すると同時に、刺激語を 1,000ms 対呈示した。なお、刺激語の中心の位置は、黒線の枠、注視枠と同様に、画面の中心から、左右にそれぞれ 115mm 離れた位置であった。最後に、刺激語を消去すると同時に、標的刺激として、手がかり刺激と同様の 5mm の赤色の線分を呈示した。標的刺激は、実験参加者が回答するまで呈示された。なお、回答から次の試行が始まるまでの時間は、1,000ms であった。

本研究では刺激語の呈示時間を 1,000ms の 1 種類に設定した。Rudaizky et al. (2014) は、刺激画像の呈示時間を 500ms と 1,000ms の 2 種類を用いていたが、この方法を用いると、試行数を 2 倍にする必要がある。本研究は Rudaizky et al. (2014) が行った実験に比べ、刺激の種類が多く、2 種類の呈示時間を用いると、実験参加者の負担が極めて大きくなり、倫理的

な問題、ならびに測定の信頼性の問題が生じる。本研究と同様に刺激語を用いて修正ドット・プローブ課題を行った Grafton et al. (2016)において、500ms ではなく、1,000ms を用いて測定する方がより良いと示唆されたため、本研究では 1,000ms を刺激語の呈示時間として採用した。

今回の実験では、地面と水平、あるいは垂直に呈示された手がかり刺激と標的刺激の方向が一致していた場合には、“J”のキーを右手の人差し指で、一致していなかった場合には、“K”のキーを右手の中指で押すように教示した。キー割り当ては、Rudaizky et al. (2014)の実験において、マウスが用いられていたことを参考に設定された。なお、実験参加者全員が、普段マウスを右手で使用していることを確認した。

**刺激語** 対呈示される刺激語には、成功関連語、失敗関連語、中性語、無意味つづりの 4 種類が用いられた。なお、それぞれの刺激語は以下の通りである。

成功関連語：成功、正解、達成、勝利、成就、成果、承認

失敗関連語：失敗、間違い、過ち、不備、しくじり、不成功、過失

中性語：空気、温度、鉛筆、天気、新聞、地図、家具

無意味つづり：ヌヨ、ヌネ、ロヌ、レヘ、ルユ、ホハ、ヘユ

成功関連語、失敗関連語、中性語は、研究 1 と同じものを用いた。無意味つづりは、梅本・森川・伊吹 (1955)を参考に、無連想価が 70-85 のものを選定した。

**呈示条件** 有意味語 (成功関連語、失敗関連語、中性語)は、常に無意味つづりと対呈示された。また、注視枠とは反対の位置に有意味語が呈示される定位条件と、注視枠と同じ位置に有意味語が呈示される解放条件があった。さらに、有意味語側に標的刺激が呈示される congruent 条件と、無意味つづり側に呈示される incongruent 条件があった。そのため、「成功-定位-congruent 条件」、「成功-定位-incongruent 条件」、「成功-解放-congruent 条件」、「成功-解放-incongruent 条件」、「失敗-定位-congruent 条件」、「失敗-定位-incongruent 条件」、「失敗-解放-congruent 条件」、「失敗-解放-incongruent 条件」、「中性-定位-congruent 条件」、「中性-定位-incongruent 条件」、「中性-解放-congruent 条件」、「中性-解放-incongruent 条件」の 12 条件があった。

**試行数** 12 条件それぞれについて 16 試行、計 192 試行がランダムに行われた。

## 質問紙尺度

実験参加者は、桜井・大谷 (1997)の作成した「多次元自己志向的完全主義尺度

(Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale: MSPS)」に回答した (Table 4.1)。MSPS は「完全性欲求」, 「高目標設定」, 「失敗懸念」, 「行動疑念」の 4 因子からなり, 20 項目, 6 件法であった。教示文は, 「次の文章は, 普段のあなたにどのくらいあてはまりますか。『6. 非常に当てはまる』から『1. 全くあてはまらない』までの 6 つのうち, あなたにいちばんよくあてはまるところの数字を○で囲んでください。」というものであった。なお, 各選択枝の説明は, 「1. 全くあてはまらない」, 「2. ほとんどあてはまらない」, 「3. あまりあてはまらない」, 「4. 少しあてはまる」, 「6. かなりあてはまる」, 「6. 非常にあてはまる」であった。

Table 4.1 研究 3 で用いた多次元自己志向的完全主義尺度 (MSPS) の項目

---

**【完全性欲求】**

- 5. どんなことでも完璧にやり遂げることが私のモットーである。
- 9. 物事は常にうまくできていないと気がすまない。
- 13. 中途半端な出来では我慢できない。
- 16. 出来る限り, 完璧であろうと努力する。
- 20. やるべきことは完璧にやらなければならない。

**【高目標設定】**

- 1. いつも, 周りの人より高い目標をもとうと思う。
- 4. 何事においても最高の水準を目指している。
- 7. 高い目標を持つほうが, 自分のためになると思う。
- 11. 簡単な課題ばかり選んでいては, だめな人間になる。
- 14. 自分の能力を最大限に引き出すような理想を持つべきである。

**【失敗懸念】**

- 3. “失敗は成功のもと”などとは考えられない。
- 6. ささいな失敗でも, 周りの人からの評価は下がるだろう。
- 10. 人前で失敗することなど, とんでもないことだ。
- 17. 少しでもミスがあれば, 完全に失敗したのも同然である。
- 19. 完璧にできなければ, 成功とはいわない。

**【行動疑念】**

- 2. 注意深くやった仕事でも, 欠点があるような気がして心配になる。
  - 8. 何かをやり残しているようで, 不安になることがある。
  - 12. 納得できる仕事をするには, 人一倍時間がかかる。
  - 15. 念には念を入れる方である。
  - 18. 戸締まりや火のしまつなどは, 何回か確かめないと不安である。
-

## 手続き

実験参加者は修正ドット・プローブ課題についての説明を受けた後、練習試行を 16 試行行った。練習試行の刺激語は、本試行への影響を避けるために、1 から 7 の数字がランダムに対呈示された。その後、本試行が 2 つのセッションに分けて実施された。前半のセッションと後半のセッションではそれぞれ 96 試行が行われ、セッションの間には 1 分間の休憩が設けられた。修正ドット・プローブ課題終了後、実験参加者は、質問紙に回答した。

## 装置

実験では、研究 1・2 で用いられていたものと同じノートパソコンが用いられた。実験参加者とモニターとの距離は、Grafton et al. (2016)を参考に、およそ 60cm になるように設定した。また、画面の中心から刺激の中心までの視角は、およそ  $10^{\circ}$  であった。

修正ドット・プローブ課題の作成・呈示には、Millisecond 社の Inquisit 4 が用いられた。

## 4.3 結果

### 質問紙尺度に関する結果

質問紙によって測定した MSPS の下位尺度ごとの平均値を下位尺度得点とした。Cronbach の  $\alpha$  係数を下位尺度ごとに算出したところ、男性の行動疑念の  $\alpha$  係数が低かった。項目 12 「納得できる仕事をするには、人一倍時間がかかる。」は、「そもそも納得できる仕事をすることはない」と考えた場合にも低く評定する可能性があり、実際に、他の行動疑念の項目と負の相関を示していた。そこで、項目 12 を削除したところ、男性の行動疑念の  $\alpha$  係数は、.61 まで改善した。MSPS については、内的一貫性にそれほど大きな問題は報告されていないことから、本研究では、項目 12 を除いた 4 項目の平均値を、行動疑念の下位尺度得点とした。その上で、下位尺度ごとの平均値、標準偏差、Cronbach の  $\alpha$  係数をデータ全体、男女別に算出し、その結果を Table 4.2 に示した。

Table 4.2 MSPS の下位尺度得点の基本統計量

	全体 ( $n=72$ )			男性 ( $n=32$ )			女性 ( $n=40$ )		
	$M$	$SD$	$\alpha$	$M$	$SD$	$\alpha$	$M$	$SD$	$\alpha$
完全性欲求	3.47	0.79	.81	3.29	0.69	.76	3.61	0.85	.83
高目標設定	3.74	1.73	.76	3.82	0.66	.69	3.68	0.78	.79
失敗懸念	3.01	0.65	.65	2.96	0.60	.64	3.06	0.69	.66
行動疑念	4.07	0.90	.76	4.09	0.65	.61	4.05	1.07	.81

注)  $M$  は平均値,  $SD$  は標準偏差,  $\alpha$  はCronbachの $\alpha$ 係数を示す。

### 修正ドット・プローブ課題に関する結果

**反応時間データの処理** 最初に、修正ドット・プローブ課題により、各実験参加者について得られた 192 試行分の反応時間データのうち、誤答を分析から除外した。また、誤答数が全試行の 10% に当たる 19.2 を超える実験参加者が男性に 1 名、女性に 2 名いたため、データの信頼性を確保するために分析から除外した。この 3 名を除外した 72 名の誤答率は平均で約 4.2% であった。次に、研究 1・2 と同様に、実験参加者ごとに、各条件の反応時間の平均値 $\pm 3SD$  より外にあるデータを外れ値として除外した。

これらの処理を加えた上で、各実験参加者の各条件の平均反応時間を、その実験参加者の

各条件における反応時間の代表値とした。

**平均反応時間の基本統計量** 各実験参加者の各条件の平均反応時間の平均値と標準偏差を，データ全体について，ならびに男女別に算出した。その結果を Table 4.3 に示した。

Table 4.3 各条件における平均反応時間の基本統計量

			全体 ( $n=72$ )		男性 ( $n=32$ )		女性 ( $n=40$ )	
			<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
成功関連語	定位条件	congruent	625.2	113.6	595.1	111.8	649.2	110.6
		incongruent	652.7	120.3	628.6	119.0	672.0	119.3
	解放条件	congruent	641.5	108.4	619.2	110.5	659.3	104.6
		incongruent	615.9	106.5	586.1	99.8	639.8	106.8
失敗関連語	定位条件	congruent	623.7	117.7	604.4	133.3	639.1	102.7
		incongruent	652.8	113.8	621.0	103.4	678.2	116.6
	解放条件	congruent	656.0	107.5	625.3	111.5	680.5	98.8
		incongruent	623.5	106.2	598.1	107.9	643.7	101.6
中性条件	定位条件	congruent	629.2	101.2	600.4	93.6	652.3	102.1
		incongruent	655.0	107.8	626.9	110.9	677.6	101.1
	解放条件	congruent	656.5	112.2	626.5	123.9	680.5	96.8
		incongruent	624.8	108.1	599.2	109.4	645.3	103.9

注) *M* は平均値，*SD* は標準偏差を示す。

**選択的注意バイアスの指標** 個人の選択的注意バイアスの度合いを検討するために，Rudaizky et al. (2014)を参考に，定位バイアス指標，解放困難バイアス指標を算出した。指標は，以下の計算式によって，個人ごとに求められた。なお，“RT”は平均反応時間を示す。

成功-定位バイアス指標

$$= (\text{「成功-定位-incongruent 条件」の RT} - \text{「成功-定位-congruent 条件」の RT}) \\ - (\text{「中性-定位-incongruent 条件」の RT} - \text{「中性-定位-congruent 条件」の RT})$$

成功-解放困難バイアス指標

$$= (\text{「成功-解放-incongruent 条件」の RT} - \text{「成功-解放-congruent 条件」の RT}) \\ - (\text{「中性-解放-incongruent 条件」の RT} - \text{「中性-解放-congruent 条件」の RT})$$



失敗-定位バイアス指標

= (「失敗-定位-incongruent 条件」の RT – 「失敗-定位-congruent 条件」の RT)

– (「中性-定位-incongruent 条件」の RT – 「中性-定位-congruent 条件」の RT)

失敗-解放困難バイアス指標

= (「失敗-解放-incongruent 条件」の RT – 「失敗-解放-congruent 条件」の RT)

– (「中性-解放-incongruent 条件」の RT – 「中性-解放-congruent 条件」の RT)

感情価のない中性語に比べ、完全主義関連語に対して、より強い定位バイアス・解放困難バイアスを示すほど、これらの指標はより大きな値をとる (Rudaizky et al., 2014)。

定位バイアス指標、解放困難バイアス指標の平均値と標準偏差をデータ全体、ならびに男女別に算出し、その結果を Table 4.4 に示した。

Table 4.4 定位バイアス・開放困難バイアス指標の基本統計量

		全体 ( $n=72$ )		男性 ( $n=32$ )		女性 ( $n=40$ )	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
成功	定位	1.74	80.84	6.93	73.47	-2.41	87.00
	解放困難	6.09	80.90	-5.81	96.07	15.61	66.10
失敗	定位	3.33	99.86	-9.81	113.53	13.84	87.50
	解放困難	-0.87	81.49	0.12	64.49	-1.67	93.71

注) *M* は平均値, *SD* は標準偏差を示す。

### 選択的注意と MSPS の下位尺度得点との相関

MSPS で測定した完全主義の下位尺度得点と、修正ドット・プローブ課題で測定した選択的注意バイアスの指標の間の Pearson の積率相関係数をデータ全体について算出した。また、男女別にも同様に算出し、その結果を Table 4.5 に示した。データ全体については、行動疑念と成功-定位バイアス指標との間に 5%水準で有意な弱い正の相関 ( $r=.30$ )が見られた。男性については、高目標設定と失敗-解放困難バイアス指標との間に弱い正の相関 ( $r=.36$ )が、失敗懸念と失敗-定位バイアス指標の間に弱い正の相関 ( $r=.37$ )が見られ、5%水準で有意であった。行動疑念と成功-定位バイアス指標の間に 1%水準で有意な中程度の正の相関 ( $r=.49$ )が見られた。女性については、有意な相関は見られなかった。

Table 4.5 完全主義の下位尺度得点と定位バイアス・開放困難バイアス指標との相関係数

		成功		失敗	
		定位	解放困難	定位	解放困難
全体	完全性欲求	.06 [-.17, .29]	-.20 [-.41, .03]	.07 [-.16, .30]	-.10 [-.33, .13]
	高目標設定	-.08 [-.30, .16]	-.06 [-.29, .17]	-.01 [-.24, .22]	-.04 [-.27, .19]
	失敗懸念	.15 [-.08, .37]	-.12 [-.34, .11]	.20 [-.03, .42]	.02 [-.21, .25]
	行動疑念	.30* [.08, .50]	-.10 [-.32, .14]	.21 [-.02, .42]	-.19 [-.40, .05]
男性	完全性欲求	.18 [-.18, .50]	-.25 [-.55, .11]	.01 [-.34, .36]	-.04 [-.38, .32]
	高目標設定	-.12 [-.45, .24]	.04 [-.31, .38]	-.10 [-.43, .26]	.36* [.01, .63]
	失敗懸念	.11 [-.24, .44]	-.10 [-.44, .25]	.37* [.03, .64]	.17 [-.19, .49]
	行動疑念	.49** [.17, .72]	-.13 [-.46, .23]	.31 [-.04, .60]	-.14 [-.46, .22]
女性	完全性欲求	.02 [-.30, .33]	-.24 [-.51, .08]	.08 [-.24, .38]	-.13 [-.43, .19]
	高目標設定	-.06 [-.37, .25]	-.14 [-.43, .18]	.09 [-.23, .39]	-.23 [-.50, .09]
	失敗懸念	.19 [-.13, .47]	-.17 [-.46, .15]	.05 [-.27, .35]	-.05 [-.36, .27]
	行動疑念	.23 [-.09, .50]	-.09 [-.39, .23]	.18 [-.14, .46]	-.20 [-.48, .12]

注) [ ]内は95%信頼区間を表わす。

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

## 4.4 考察

本研究の目的は、修正ドット・プローブ課題を用い、成功関連語と失敗関連語に対する定位バイアス・解放困難バイアスと、完全主義との関連を検討することであった。

### 完全主義と定位バイアス・開放困難バイアスとの関連 (全体)

データ全体については、行動疑念と成功-定位バイアス指標の間にのみ弱い正の相関が見られ、完全性欲求については、いずれの選択的注意バイアスとも関連が見られなかった。そのため、仮説 1 は支持されたが、仮説 2～仮説 4 は支持されなかった。

しかし、この結果は、後述するように、選択的注意バイアスと完全主義との関連が性別によって大きく異なるにも関わらず、男女のデータを併合して分析しているためにもたらされたものであると考えられる。全体のデータで見られた行動疑念と成功-定位バイアス指標の間の正の相関についても、男性で特に強く見られた相関が、女性のデータと併合することによって弱められたものであると考えられる。そのため、性別を考慮しない全体のデータにおける関連は、現象を適切にとらえていない可能性があり、その解釈に慎重になる必要があると考えられる。

### 完全主義と定位バイアス・解放困難バイアスとの関連 (男性)

男女別でデータを分割し、定位バイアス指標・解放困難バイアス指標と MSPS の各下位尺度得点との相関分析を行ったところ、男性と女性で異なる相関行列のパターンが見られた。このことは、研究 1 において、性別によって選択的注意バイアスと完全主義との関連が異なることが示唆されていることとも一致している。

男性については、MSPS の各下位尺度得点と、成功関連語や失敗関連語に対する定位・解放困難バイアスとが関連しており、以下のような様相であった。

**完全性欲求との関連** 完全性欲求と成功関連語・失敗関連語への選択的注意バイアスとの関連は見られなかった。そのため、男性のデータについても、仮説 1 は支持された。

完全性欲求は完全主義の基本的な特徴ではあるものの、適応に影響しない側面であると想定されている。実際に、桜井・大谷 (1997)でも、抑うつや絶望感と関連が見られなかった。また、完全主義者の持つ選択的注意バイアスが不適応につながる (Shafran et al., 2002) ことと合わせて考えれば、「できる限り、完璧であろうと努力する」といった完全主義の基本的

特徴自体は、選択的注意バイアスを生じさせることなく、適応的でも不適応的でもないことが示唆された。

**高目標設定との関連** 高目標設定と失敗-解放困難バイアス指標との間に正の相関が見られた。そのため、仮説 2 は支持されなかった。

このことから、高目標設定は、完全主義の適応的な側面として概念化されているが、失敗から注意をそらすことが困難であるといった不適応的であると考えられる選択的注意バイアスを導き、認知的なレベルでは不適応的にはたらくことが示唆された。しかし、様々な先行研究 (e.g., 桜井・大谷, 1997; 清水・古井, 2004)において、高目標設定の適応的なはたらきが報告されている。そのため、失敗から注意をそらすことができず、悔やむからこそ、高い目標に向かって努力をすることができる可能性がある。また、高い目標を設定し、達成に向かって努力し、目標を達成するといった、行動レベルで高目標設定が適応的にはたらいっている可能性も考えられる。

**失敗懸念との関連** 失敗懸念と失敗-定位バイアス指標との間に正の相関が見られた。そのため、仮説 3 は支持された。

失敗懸念の尺度項目の内容は、「ささいな失敗でも、周りの人からの評価は下がるだろう」、「人前で失敗することなど、とんでもないことだ」といったものであり、失敗を悔やむというよりは、失敗を過大にとらえ、恐れるといったものになっている。そのため、失敗懸念が高い人は、失敗から注意をそらすことが困難なのではなく、失敗していないかを注意深くモニタリングし、結果としてささいな失敗に対して注意を向けてしまい、不適応に陥ることが示唆された。Shafran et al. (2002)は、Frost et al. (1997)の結果をもとに、失敗懸念と選択的注意バイアスとは無関係であろうと主張していた。しかし、この結果から、男性に関しては、失敗懸念は失敗への定位バイアスと関連があることが示された。男性については、Shafran et al. (2002)の主張とは異なる結果であったが、女性や全体のデータについては関連が見られず、一致している。そのため、失敗懸念と失敗への定位バイアスとの関連は、性別ごとに分析することによって得ることができた新奇な結果であると考えられる。

**行動疑念との関連** 行動疑念と成功-定位バイアス指標との間に正の相関が見られた。そのため、仮説 4 は支持されなかった。

行動疑念は完全主義の不適応的な側面であるが、成功に対する定位バイアスとの関連が見られた。そのため、認知レベルでは、行動疑念は適応的にはたらくことが示唆された。一方、有意ではないものの、失敗-定位バイアス指標とも.31の相関を示しており、一概に適応

的な側面ばかりではないと考えられる。また、成功に注意が向きやすいことが適応的であるかは判然としない。行動疑念が高い人が、成功・失敗の両方に対して定位バイアスを持つとすると、物事が成功しているか、失敗しているかを注意深くモニタリングしており、完全主義者の設定する高い目標と相まって、結果として失敗を多く経験することになり、不適応に陥る可能性が考えられる。

### **完全主義と定位バイアス・解放困難バイアスとの関連 (女性)**

女性のためのデータでは、MSPSの下位尺度得点と、選択的注意バイアス指標の間に相関が見られなかった。そのため、女性のデータに関しては、仮説1は支持されたが、仮説2～仮説4は支持されなかった。すなわち、女性の完全主義傾向は、選択的注意バイアスと関連していない可能性が示唆された。なお、Table 4.4において、定位バイアス・開放困難バイアス指標の平均値に、性別によって一定の差が見られた。しかし、女性において標準偏差は小さくなく、指標によっては男性よりも標準偏差が大きいものも見られることから、天井効果や床効果によって、女性だけがとりわけ分布が狭くなっているとは考えにくい。そのため、女性のデータにおいて、完全主義と選択的注意バイアスとの相関を低くするような問題は生じていないと考えられる。

### **研究3の結論**

本研究では、修正ドット・プローブ課題を用いることによって、定位バイアスと解放困難バイアスを弁別して測定し、完全主義との関連を検討した。その結果、定位バイアス・解放困難バイアスの両方と関連を示したMSPSの下位尺度はなかった。先行研究や、研究1・2で用いられていた方法では、完全主義が選択的注意バイアスと関連していることがわかっていても、定位バイアスと解放困難バイアスのいずれと関連しているかが判然としなかった。だが、本研究によって、完全主義の側面によって、それぞれ異なる形で定位バイアス・解放困難バイアスと関連していることが明らかになり、より精緻に完全主義と選択的注意バイアスの関連を検討することができたと考えられる。

また、研究3では、男性のためのデータでは、高目標設定と失敗からの解放困難バイアスの間、失敗懸念と失敗への定位バイアスの間、行動疑念と成功への定位バイアスの間に関連が見られたが、女性では完全主義と選択的注意バイアスとの関連は見られなかった。そのため、完全主義と選択的注意バイアスの関連が性別によって異なることが示唆された。この結果

は、研究 1 の結果と一致しており、選択的注意バイアスを、定位バイアスと解放困難バイアスとに弁別して検討しても、男女で関係が異なるという結果が得られた。研究 2 において、対人場面における完全主義関連語に対しても、女性の完全主義者が選択的注意バイアスを示さなかったことを考慮すると、選択的注意バイアスを示すのは男性の完全主義者のみで、女性の完全主義者は選択的注意バイアスを示さないことの蓋然性が高まったと考えられる。

## 第5章

### 総合考察

## 5.1 本論文における研究結果のまとめ

本論文では、完全主義がいかにして適応・不適応的にはたらくのかを検討するために、Shafran et al. (2002)が臨床的な観察から示唆した、失敗への選択的注意バイアスを取りあげ、認知行動実験パラダイムを用いて実証的に検討した。

研究1では、完全主義と選択的注意バイアスの関連を、認知行動実験パラダイムを用いて検討した研究の問題点(課題、刺激語、性差)を解決するために、ドット・プローブ課題を用い、完全主義と成功関連語・失敗関連語に対する選択的注意バイアスとの関連を検討した。その結果、男性では、完全主義の各側面と、成功関連語や失敗関連語への選択的注意バイアスとの関連が見られたが、女性では関連が見られなかった。

研究2では、研究1の結果を踏まえ、より対人場面に近い刺激語であれば女性の完全主義者でも関連が見られる可能性を検討した。具体的には、研究1と同様に、ドット・プローブ課題を用い、完全主義と対人場面における成功関連語・失敗関連語に対する選択的注意バイアスとの関連を検討した。その結果、女性だけでなく、男性でも関連が見られなかった。そのため、完全主義者は対人場面における成功・失敗に対しては選択的注意バイアスを示すわけではないことが示唆された。

研究3では、選択的注意における定位バイアス・解放困難バイアスを弁別して測定できる修正ドット・プローブ課題を用い、完全主義との関連をより精緻に検討した。その結果、男性では、完全主義の下位尺度ごとに、定位バイアスか解放困難バイアスのどちらかとのみ関連が見られ、各側面によって関連が見られるバイアスが異なることが明らかになった。一方、女性では、完全主義と定位バイアス・解放困難バイアスとの関連は見られなかった。



## 5.2 本論文の意義と今後の課題

本論文の意義、ならびに今後の課題を、実証的アプローチ、性差、完全性の領域の大きく3つの観点から述べる。

### 完全主義と選択的注意バイアスとの関連に対する実証的アプローチ

Shafran et al. (2002)は、臨床的な観察から不適応的な完全主義者は特有の認知スタイルを有することを指摘した。本論文では、その中でも不適応の根幹にあたる特徴として、選択的注意バイアスを取り上げ、認知行動実験パラダイムを用い、実証的に検討した。

**方法論について** 完全主義者の選択的注意バイアスの問題については、いくつかの先行研究が取り組んできたものの、第1章で述べたように、それぞれ問題点を有していた。選択的注意バイアスのように自動的で、無意識的なもの (Mathews, 1990)をとらえる際に、Frost et al. (1997)のように、自己報告式の評価尺度を用いることは、様々な測定上の誤差が混入し、妥当性・信頼性の高いデータを得ることは困難であると考えられる。また、認知行動実験パラダイムでも、Lundh & Öst (1996)や Kobori & Tanno (2012)のように、選択的注意バイアスを測定するために情動ストループ課題を用いることには、様々な問題がある (Bögels & Mansell, 2004; Cloitre et al., 1992; Ruiter & Brosschot, 1994; Wells & Matthews, 1994)。実際に、研究1において、自己志向的完全主義と失敗関連語への選択的注意バイアスとの関連を検討したところ、積極的に解釈できるほど強い関連は見られず、関連が見られた Kobori & Tanno (2012)と異なる結果が得られた。この相違は、Kobori & Tanno (2012)が情動ストループ課題を用いたために、選択的注意バイアス以外の要素を混同して測定してしまっているために生じた可能性がある。そのため、先行研究で広く使われてはいるものの、情動ストループ課題を、選択的注意バイアスを測定する課題として用いることは、適切ではないと考えられる。

本論文では、ドット・プローブ課題や修正ドット・プローブ課題といった、選択的注意バイアスを測定するためにより適切と考えられる課題を用い、より精緻に完全主義との関連を検討することができた。特に、修正ドット・プローブ課題は、国内ではほとんど用いられてはいないが、定位バイアスと解放困難バイアスといった、本来異なる過程である2種類の注意バイアスを弁別して測定することのできる課題である。これにより、完全主義特性と2種類の選択的注意バイアスとの関連を精緻に捉えることができた点は、大きな意義を有す

ると考えられる。

一方で、認知行動実験パラダイム特有の問題も存在する。このパラダイムは、質問紙調査などの測定ではとらえることの難しい認知的な特徴を抽出し、測定することができる。だが、測定された反応時間などに基づいた認知的な指標が、どの程度現実との対応がとれるのかについては、必ずしも判然としない。本論文の場合、成功関連語や失敗関連語に対する選択的注意バイアスを測定することによって、現実場面における成功や失敗に対する選択的注意バイアスを間接的に測定した。しかし、刺激語に対するふるまいが、現実でのふるまいに完全に一致するとは断言できない。また、§2.1の「問題と目的」で述べた通り、本研究では成功に対して選択的注意バイアスを示すことがポジティブな効果を、失敗に対して選択的注意バイアスを示すことがネガティブな効果を持つことを前提とした議論を行っている。しかし、思考や行動、環境のレベルまで考えた場合に、前提通りではない場合もありうる。たとえば、成功恐怖 (Horner, 1968) 傾向の高い人にとって、成功に対して注意を向け、成功を経験したと知覚することは、後の失敗に対する不安や、周囲の嫉妬を受けるのではないかとといった恐怖に繋がる。このような人にとって、成功に注意が向きやすいことは、ネガティブな効果を持つ可能性がある。反対に、失敗に対して注意を向けることによって、それをバネとし、次の課題への動機づけにつなげるといったポジティブな効果を持つ可能性もある。これに関しては、ストレスフルなイベントによって、成長感が経験されるといった「ストレス関連成長 (stress-related growth)」と関連したものとしてとらえることができる。この現象が起こりうることを考慮すると、イベントの失敗した側面に注意を向けることによって、ストレス関連成長の足がかりを得ることにつながると考えられる。また、近年、ストレス関連成長は、Schaefer & Moos (1992)によって提案された心理的ストレスモデル (Lazarus & Folkman, 1984)の枠組みでとらえられている。この枠組みでは、ソーシャル・サポートなどの「環境システム」と、パーソナリティなどの「個人システム」が、どのようにストレスを認知するかといった「認知的評価」や、ストレスに対してどのように対処するかといった「コーピング」に影響し、その結果ストレス関連成長が生じると仮定されている。この枠組みにおいては、選択的注意バイアスのような個人システムに属するものだけでなく、環境システムの変数が重要な役割を果たしている。そのため、個人がどのような環境にいるかといったことが適応のあり方に影響を与えている可能性もある。このように、認知行動実験パラダイムによって示した結果や考察が、現実の認知や思考、行動の全てを反映できているとは断言できない。そのため、今後は、より現実場面に近い実験室実験や、質問紙による

環境の変数の測定などを用いる必要があるだろう。現実場面に近い実験室実験としては、課題を行わせ、その成績について称賛する内容と批判する内容の入り混じった評価文章を呈示し、その文章のどこに注目するか視線測定を行ったり、評価文章の再生を行わせたりして、選択的注意バイアスを測定するといった方法が考えられる。しかし、この方法単体では、選択的注意バイアス以外の要素も混入する可能性が高い。そのため、このような現実場面に近い方法と、本論文で用いたような認知行動実験パラダイムとを併用することが望ましい。さらに、質問紙によって環境の変数を測定することによって、個人のふるまいの外にありながら強い影響を及ぼすと考えられる要因についても検討する必要があるだろう。それぞれの方法の長所、短所を補い合いながら、完全主義者の認知、行動、適応の関係を明らかにする必要がある。

**臨床的な観察とは異なる結果** 本論文によって、Shafran et al. (2002)が指摘したような完全主義と選択的注意バイアスの関連が実証的に確かめられた。一方で、Shafran et al. (2002)の主張は、必ずしも全てが認められたわけではない。

たとえば、Shafran et al. (2002)は、「失敗への選択的注意バイアス」として、完全主義者は失敗に対しては注意を向け、成功からは注意をそらすことを示唆した。しかし、研究1におけるMPCIの完全性追求や、研究3におけるMSPSの行動疑念といった側面は、成功に対して注意を向けさせるといった結果が得られた。このことは、完全主義の適応・不適応の両面性を示唆するものであり、完全主義が単に不適応的な性格特性であるといったモデルは必ずしも適切ではないと考えられる。他にも、Shafran et al. (2002)は、Frost et al. (1997)の結果をもとに、失敗懸念と選択的注意バイアスとは無関係であろうと主張していた。しかし、研究3において、男性の失敗懸念と失敗関連語への定位バイアスとの関連が見られた。そのため、男性に関しては、Shafran et al. (2002)の主張と異なる新奇な結果が得られた。

これらの結果から、完全主義について、臨床的な観察に基づく指摘はある程度正しいものの、部分的には誤った部分がある可能性が示唆された。このことは、実証的にデータをとって初めて明らかになることである。臨床的な観察による示唆を基に、実証的なデータによる研究を行う。さらに、研究で得られた成果を基に、観察のパターンを変えることによって、新たな知見が見出されることが期待される。このように、臨床的な観察と実証的な研究の両方を循環的に行うことによって、完全主義をはじめとした心理現象の理解は着実かつ速やかに進むと考えられる。今後は、研究と臨床の双方がその枠に閉じるのではなく、互いに交流を密にし、現象の学術的な理解と不適応で苦しむ人々への援助の両方を志すことが求め

られるだろう。

### 完全主義と選択的注意バイアスの関連における性差

本論文によって、完全主義と選択的注意バイアスの関連において、性差が見られることが示唆された。研究1において、男性でのみ関連が見られ、女性では関連が見られなかった。そこで、研究2では、女性に親和性が高いと考えられる対人場面における完全主義関連語をドット・プローブ課題の刺激語として用いたが、なおも女性では関連が見られなかった。さらに、研究3では、修正ドット・プローブ課題を用い、定位バイアス・解放困難バイアスに弁別して検討しても、男性でのみ関連が見られ、女性では見られなかった。これらの結果から、断定はできないものの、女性の完全主義者は選択的注意バイアスを示さないことの蓋然性は高いものであると考えられる。

女性の完全主義者に選択的注意バイアスが見られないという知見は新奇であり、本論文によって明らかになったことである。そのため、その原因やメカニズムについては、本論文の結果だけでは判然とせず、今後明らかにされるべきことである。しかし、その原因については、生得的で生物学的な問題というよりは、性別と共変する何らかのパーソナリティ変数や社会的変数の問題である可能性が高いと考えられる。たとえば、研究1で提案したように、女性特有の性役割に由来すると考えられてきた「成功恐怖」は、考える原因の1つである。成功恐怖とは、競争や成功に伴う負の感情であり、女性は成功への努力によって、競争的、攻撃的であるとみなされ、社会的に拒絶されるのではないかと懸念する。この懸念が葛藤と不安を呼び起こし、成功を望むと同時に成功を恐れることになる (Horner, 1968)。成功恐怖傾向の高い女性にとって、成功や失敗という事象は、複雑な意味を持つことになり、それらに対する選択的注意バイアスのはたらき方も異なってくる可能性がある。しかし、この要因は性別と深く関係するものの、全ての女性に成功恐怖が見られるわけではなく、男性に見られないわけでもない。すなわち、成功恐怖は女性にのみ発現する生得的なものではなく、女性に成功恐怖を促すような社会環境によって形成される部分が大きい。そのため、女性の完全主義者が選択的注意バイアスを示さないというよりは、成功恐怖のような女性に特に強く見られるパーソナリティ特性や社会的な変数によって、完全主義と選択的注意バイアスの関係が調整され、関連が見られなくなっていると考えられる。そのため、このように性別と共変し、完全主義と選択的注意バイアスとの関係を調整する変数を特定することが今後必要となるだろう。

## 完全性の領域

**刺激語の馴染み深さ** 研究1において、男性でのみ完全主義と成功関連語・失敗関連語への選択的注意バイアスとの関連が見られ、女性では関連が見られなかった。このことから、女性の完全主義者は成功や失敗に対して選択的注意バイアスを示さないことが示唆された。しかし、研究1で用いられた刺激語が課題場面に関連しているものが多かったため、刺激語への馴染み深さの問題で関連が見られなかった可能性があった。このことを検討するために、女性により馴染み深いと考えられる対人場面に関連した刺激語を用いた研究2を行った。その結果、男性、女性のいずれでも、完全主義と対人場面に関連した成功関連語・失敗関連語への選択的注意バイアスとの関連は見られなかった。本論文では、完全主義と選択的注意バイアスとの関連における性差の原因を、刺激語の問題に求めるのではなく、選択的注意バイアスを定位バイアス・開放困難バイアスに弁別していないためである可能性を考慮し、研究3を行った。

しかし、刺激語の馴染み深さが完全主義と選択的注意バイアスとの関連を調整する可能性を完全に棄却できるわけではない。研究2では、女性にとって対人場面における成功・失敗は馴染み深いことを想定したが、単純に性別によって馴染み深い領域が決定されるのではなく、人によって、何が馴染み深いのが異なる可能性が残る。これに基づいて研究1・2を総合して考えると、男性の完全主義者のほとんどにとって、特異的に課題場面における成功・失敗が重要である一方で、女性の完全主義者にとっては、人によって重要であったりそうでなかったりする可能性が示唆される。そして、対人場面における成功・失敗については、男性・女性の完全主義者のいずれとも、人によって重要性がまちまちであり、男女のいずれでも完全主義と選択的注意バイアスとの関連が見られなかった可能性がある。このような可能性を棄却するためには、個人ごとにどのような領域が重要であるのかを測定し、それらに対する重要度や馴染み深さが、完全主義と領域における成功・失敗に対する選択的注意バイアスとの関連を調整するかを検討するといった研究を行うことが望まれる。しかし、この研究を行うことは容易ではない。なぜなら、重要な領域は千差万別である可能性があるためである。重要な領域は、人によっては学業であり、人によっては対人関係である。他にも、スポーツや、体型などの外見、経済、社会的地位など、様々な領域が考えられる。それら全ての成功・失敗に関する刺激語をあらかじめ準備することは困難である。仮に準備できたとしても、今回用いたようなドット・プローブ課題や修正ドット・プローブ課題で同様の

検討を行おうとすれば、膨大な試行数を実験参加者に求めることになり、疲労や集中力の欠如によって、かえって測定の信頼性を損なうことになる。そのため、本論文のように、多くの人に重要な領域であると考えられる課題場面や対人場面といった要素にしばって検討を行ったこと、定位・解放困難バイアスの弁別に性差の原因を求めたことには一定の意義があると考えられる。

**領域固有の (domain-specific)完全主義** また、本論文と直接関係はしないが、領域に対する選択的注意バイアスだけでなく、領域固有の (domain-specific)完全主義 (e.g., 課題に対する完全主義, 対人場面に対する完全主義)の存在も想定することができる。たとえば、学業においては完全性を求めるが、対人関係やスポーツに関しては完全主義でない人や、勉強は落第でなければそれでいいが、一生懸命取り組んでいるスポーツ競技に関しては完全な成果を求める人、あるいは、何事においても完全性を求める人など、領域ごとに完全性を求めるかどうか人がによって異なる可能性が想定できる。そして、どの領域に完全主義を示すかによって、適応・不適応のあり方が異なる可能性がある。しかし、このことについて検討した研究は、質問紙などの調査法を用いたものでも国内はおろか、国際的にもあまり見られない。そもそも、完全主義は一貫したパーソナリティ特性であり、状況を超えて一定であるという想定が強い。たとえば、Flett & Hewitt (2002)は、「完全主義とは、完全性への希求であり、完全主義者とは、生活のあらゆる側面で完全でありたいと思う人々である (p.5)」との定義をしている。このような全体的完全主義 (global perfectionism)の定義にならえば、領域固有の完全主義は定義から外れることになる。しかし、Shafran et al. (2002)は、完全性を求めるのがたとえ 1 つの領域であったとしても、それが§1.4 で述べたような完全主義の認知の悪循環を生じるのであれば、臨床的な問題につながることを指摘している。全体的完全主義と、領域固有の完全主義の対立は、「性格の一貫性論争」<sup>2</sup>とも対応する問題であり、どちらが正しいとは一概に断定できない。

領域固有の完全主義については、数は少ないものの、いくつか先行研究がある。国内では、

---

<sup>2</sup> 「性格の一貫性論争」とは、性格 (パーソナリティ)は時間的・空間的に一貫しているという特性論的な考え方と、個人の行動は状況によって大きく異なり、個人の内部にある一貫した性格によってではなく、状況によって行動が決定されるという「状況主義」の対立を示す。状況主義は、Mischel (1968)が実証的研究を通し、性格に通状況的な一貫性が見られないことを示したことから生じたものである。特性論と状況主義のどちらが正しいのかについては、現在においても完全な決着は見られていない。

矢澤・金築・根建 (2013)がダイエット行動において固有に生起する完全主義的思考や自己陳述を調査し、“the Perfectionistic Self-statements Inventory about Dieting (PSI-D)”を作成している。しかし、この研究は完全主義よりも、むしろダイエット行動に関する関心から行われたものである。そのため、ダイエットに関わる要因として、ダイエットに固有の完全主義については論じているものの、他の領域に固有の完全主義との比較などは行われていない。国際的には、Saboonchi & Lundh (1999)が課題解決と対人的な文脈における完全主義的思考を比較し、文脈間の一貫性が低いことを指摘している。他にも、Mitchelson & Burns (1998)は、働いている母親 (career mother)は、家庭よりも仕事に対する完全主義傾向が高いことを示している。また、McArdle (2010)は、学力の高い青年は、スポーツではなく、学業においてのみ完全主義傾向を示すことを示唆している。さらに、Dunn, Gotwals, & Dunn (2005)は、大学生アスリートが、学業よりもスポーツに対して完全主義的傾向が高いことを示している。これらの研究に共通していることは、矢澤他 (2013)と同様に、領域固有の完全主義の様相を明らかにしようという動機よりは、むしろ、特定の人々や問題について明らかにするという動機に基づいているため、比較している領域が少ないことである。より広範な領域を扱った研究としては、Haase, Prapavessis, & Owens (2013)が挙げられる。Haase et al. (2013)は、大学生を対象に、大学/仕事、対人関係、身体運動、家庭環境、外見の5つの領域について、それぞれにおける適応的・不適応的な完全主義を測定し、それらの関係や性差を検討している。その結果、大学/仕事領域の完全主義が他の領域に比べて高いことが明らかになった。他にも、女性は、適応的な完全主義が大学/仕事領域では高く、身体運動領域では低かった。一方、男性では、適応的な完全主義が身体運動領域において高かった。さらに、女性では、不適応的な完全主義が大学/仕事領域と外見領域で高いが、男性は全体的にどの領域も同程度であった。これらのことから、領域によって完全主義傾向の高低が異なること、その高低のパターンには性差が見られることが明らかになった。しかし、Haase et al. (2013)では、これらの領域固有の完全主義と、抑うつなどの実際の適応との関連は検討されていない。そのため、全体的完全主義についての研究で明らかになった適応的/不適応的な完全主義の側面が、領域を超えてなお適応的/不適応的なのか、それとも領域ごとに適応性が変わるのかといったことは判然としない。

このように、領域固有の完全主義の先行研究はいくつか存在しているが、全体的完全主義を想定した研究に比べれば、その数は極めて少ない。しかし、領域ごとに完全主義の様相が異なるといったこれらの先行研究があることから、領域固有の完全主義は無視できない

問題である。そのため、現在数の少ない領域固有の完全主義に関する研究を行い、全体的完全主義の研究と比較し、適応などの変数の予測可能性などから、どちらの想定がより妥当なのかを検討する必要がある。あるいは、対立する両者の立場を取り入れたモデルを構築することも考えられる。たとえば、全体的完全主義を一般因子、領域に対して個人が感じる重要性などを特殊因子と仮定し、領域固有の完全主義が両方の因子の影響を受けて決定されるといったものである (Figure 5.1)。これを検討するためには、全体的完全主義、領域固有の完全主義、特殊因子としての領域の重要性などの変数を同時に測定する必要があるだろう。

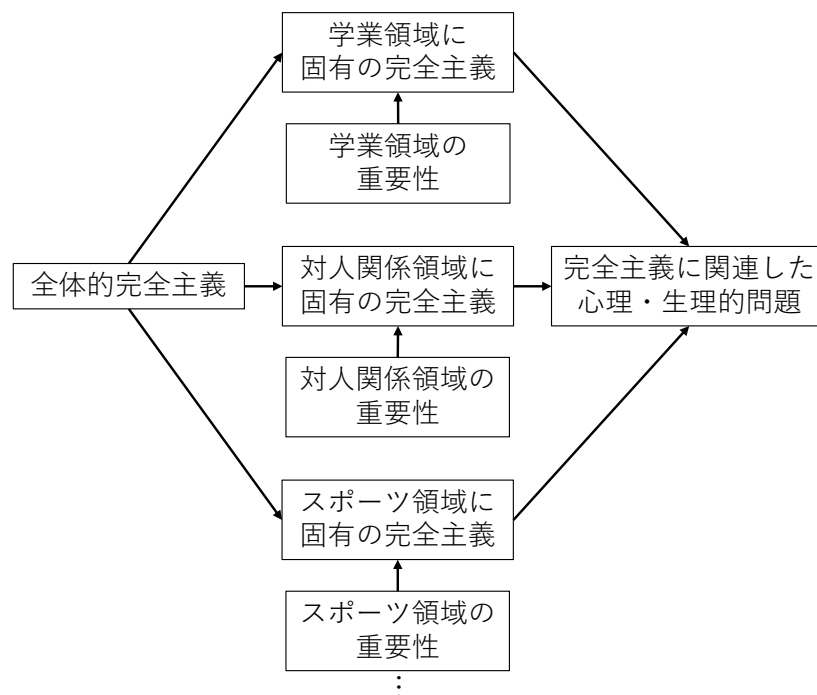


Figure 5.1 全体的完全主義と領域固有の完全主義のモデル

本論文では、完全主義と選択的注意バイアスとの関連を検討したが、扱った完全主義は全体的完全主義である。しかし、課題領域の刺激語に対する選択的注意バイアスは、実は、課題領域に固有の完全主義と関連がある可能性がある。上記のモデルに基づけば、全体的完全主義は一般因子として、領域固有の完全主義に一定の影響は与える。だが、領域の重要性などの特殊因子の影響も受けるため、全体的完全主義が高いとしても、領域固有の完全主義も高いとは限らない。特に、研究2で、完全主義と対人場面に関する刺激語に対する選択的注意バイアスとの関連が見られなかったのは、対人領域に固有の完全主義は、全体的完全主義



よりも特殊因子の影響が強かったためである可能性がある。すなわち、全体的完全主義が高いとしても、対人場面に関する刺激語に対する選択的注意バイアスと関係のある対人領域に固有の完全主義が高いとは限らないと考えられる。この想定に基づけば、完全主義と、ある領域についての成功・失敗に対する選択的注意バイアスとの関連を検討するためには、全体的完全主義ではなく、その領域に固有の完全主義を測定する必要がある。

しかし、これらの考察は、いくつかの仮定の上に成り立っているものである。そのため、領域固有の完全主義と選択的注意バイアスとの関連を検討する前の段階として、領域固有の完全主義と適応などの他の変数との関連を検討したり、全体的完全主義と領域固有の完全主義の対立を解決できる上述のモデルの妥当性を検証したり、そのモデルに含まれる特殊因子の特定をしたりする必要がある。これらの研究は、質問紙法などの簡便に多くのデータを集められる方法によって、十分に実行可能であると考えられる。そのため、領域固有の完全主義についてより精緻に検討した上で、本研究のような認知行動実験パラダイムを用い、領域固有の完全主義と選択的注意バイアスとの関連を検討することが現実的であり、意義があると考えられる。

## 5.3 おわりに

本論文で、完全主義者が現実をとらえる方法には、一定の偏りが見られることが確認された。Shafran et al. (2002) が示唆するように、完全主義者は、選択的注意を行う中で、自らの現実を歪め、不当に悪く、あるいはとても緊張に満ちたものに評価する。このことは、なにも完全主義の概念の中だけで閉じた話ではない。Beck (1976)や Lazarus & Folkman (1984)が示したように、あらゆる人々が無自覚・無意識的に行っていることなのである。一方で、Shafran et al. (2002)が指摘したものとは異なり、完全主義者の選択的注意バイアスにも、適応的であると考えられる側面が見られた。その関連は、単純に適応・不適応で断ずることは困難な、複雑でダイナミックなものである。また、完全主義と選択的注意バイアスとの関連の性差に関わる変数の特定や、領域固有の完全主義の可能性といった、新たな研究につながる知見も多く得られた。これらの研究を通し、完全主義のあり方について、さらなる研究を今後も行っていく必要がある。

本論文で明らかになった現実のとらえ方の偏りは、認知行動実験パラダイムでとらえたものである。現実との対応づけの難しさなど、その限界も大きい。筆者が今回の研究で示したことは、人が無自覚に構成し、それがまさに疑いようのない現実なのだと信じられ、その中でその人がふるまう、主観的な現実のありかたの、ほんの一端でしかない。人が構成する、豊かな主観的な現実をとらえるためには、様々な方法を組み合わせて、これからも精緻な検討を行わなければならない。そのことが、これからの大きな課題であり、個人差の源泉はどこにあるのか、ひいては人間とはなにかを理解するために、必要なことである。

## 引用文献

- Axtell, A., & Newlon, B. J. (1993). An analysis of Adlerian life themes of bulimic women. *Individual Psychology: Journal of Adlerian Theory, Research and Practice*, 49, 58-67.
- Beck, A. T. (1976). *Cognitive Therapy and the Emotional Disorders*. New York: International University Press.
- Blatt, S. J., & Zuroff, D. C. (1992). Interpersonal relatedness and self-definition: Two prototypes for depression. *Clinical Psychology Review*, 12, 527-562.
- Bögels, S. M., & Mansell, W. (2004). Attention processes in the maintenance and treatment of social phobia: hypervigilance, avoidance and self-focused attention. *Clinical Psychology Review*, 24, 827-856.
- Brewerton, T. D., & George, M. S. (1993). Is migraine related to eating disorders? *International Journal of Eating Disorders*, 14, 75-79.
- Burns, D. (1980). The perfectionist's script for self-defeat. *Psychology Today*, 34-57.
- Cloitre, M., Heimberg, R. G., Holt, C. S., & Liebowitz, M. R. (1992). Reaction time to threat stimuli in panic disorder and social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, 30, 305-307.
- Dunn, J. G. H., Gotwals, J. K., & Dunn, J. C. (2005). An examination of the domain-specificity of perfectionism among intercollegiate student-athletes. *Personality and Individual Differences*, 38, 1439-1448.
- Flett, G. L., & Hewitt, P. L. (2002). Perfectionism and maladjustment: an overview of theoretical, definitional, and treatment issues. In G. L. Flett, & P. L. Hewitt (Eds.), *Perfectionism: theory, research, and treatment* (pp. 5-31). Washington, DC: American Psychological Association.
- Flett, G. L., Hewitt, P. L., Blankstein, K. R., & Gray, L. (1998). Psychological distress and the frequency of perfectionistic thinking. *Journal of Personality and Social Psychology*, 12, 61-68.
- Flett, G. L., Hewitt, P. L., Blankstein, K. R., Kirk, K., & Dynin, C. B. (1994). Dimensions of perfectionism and type A behavior. *Personality and Individual Differences*, 16, 477-485.
- Flett, G. L., Hewitt, P. L., Blankstein, K. R., & Mosher, S. W. (1991). Perfectionism, self-actualization, and personal adjustment. *Journal of Social Behavior and Personality*, 6, 147-160.
- Flett, G. L., Hewitt, P. L., & Dyck, D. G. (1989). Self-oriented perfectionism, neuroticism, and anxiety. *Personality and Individual Differences*, 10, 731-735.

- Forman, M. A., Tosi, D. J., & Ruby, D. R. (1987). Common irrational beliefs associated with the psychophysiological conditions of low back pain, peptic ulcers and migraine headache: A multivariate study. *Journal of Rational Emotive Therapy*, 5, 255-265.
- Frost, R. O., & Grows, R. C. (1993). The hoarding of possessions. *Behavior and Therapy*, 31, 367-381.
- Frost, R. O., & Henderson, K. J. (1991). Perfectionism and reactions to athletic competition. *Journal of Sport Exercise Psychology*, 13, 323-335.
- Frost, R. O., Marten, P. A., Lahart, C., & Rosenblate, R. (1990). The dimensions of perfectionism. *Cognitive Therapy and Research*, 14, 449-468.
- Frost, R. O., Trepanier, K., Brown, E. J., Heimberg, R., Juster, H. R., Makris, G. S., & Leung, A. W. (1997). Self-monitoring of mistakes among subjects high and low in perfectionistic concern over mistakes. *Cognitive Therapy and Research*, 21, 209-222.
- Grafton, B., Southworth, F., Watkins, E., & MacLeod, C. (2016). Stuck in a sad place: Biased attentional disengagement in rumination. *Emotion*, 16, 63-72.
- Haase, A. M., Prapavessis, H., & Owens, R. G. (2013). Domain-specificity in perfectionism: Variations across domains of life. *Personality and Individual Differences*, 55, 711-715.
- Hall, J. A. (1984). *Nonverbal sex differences: Communication accuracy and expressive style*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press.
- 林 潔 (2001). 抑うつ傾向と関連するType A行動様式および完全主義的思考傾向の構成要因の検討 白梅学園短期大学紀要, 37, 1-10.
- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1990). Perfectionism and depression: A multidimensional analysis. *Journal of Social Behavior and Personality*, 5, 423-438.
- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1991). Perfectionism in the self and social contexts: Conceptualization, assessment, and association with psychopathology. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 456-470.
- Hewitt, P. L., Flett, G. L., & Turnbull-Donovan, W. (1992). Perfectionism and suicidal potential. *British Journal of Clinical Psychology*, 31, 181-190.
- Hollender, M. H. (1965). Perfectionism. *Comprehensive Psychiatry*, 6, 94-103.
- Horner, M. S. (1968). *Sex differences in achievement motivation and performance in competitive and non-competitive situation*. Unpublished doctoral dissertation, University of Michigan.

- 石田 裕明 (2002). Perfectionism Cognitions Inventory (PCI)日本語版の信頼性と妥当性の検討  
日本性格心理学会第11回大会発表論文集, 56-57.
- 石毛 みどり・無藤 隆 (2005). 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連——受験期の学業場面に着目して—— 教育心理学研究, 53, 356-367.
- 石井 秀宗 (2014). 人間科学のための統計分析——ここに関心があるすべての人のために—— 医歯薬出版
- 河村 照美 (2003). 親からの期待と青年の完全主義傾向との関連 九州大学心理学研究, 4, 101-110.
- 小林 正幸 (2005). 学校不適応 中島 義明・繁桝 算男・箱田裕司 (編) 新・心理学の基礎知識 (pp.438-439) 有斐閣
- 小堀 修・丹野 義彦 (2004). 完全主義の認知を多次元で測定する尺度作成の試み パーソナリティ研究, 13, 34-43.
- Kobori, O., & Tanno, Y. (2012). Self-oriented perfectionism and its relationship to selective attention: An experimental examination using social cognitive paradigm. *Japanese Psychological Research*, 54, 418-423.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer Publishing Company.
- Lundh, L., & Öst, L. (1996). Stroop interference, self-focus, and perfectionism in social phobias. *Personality and Individual Differences*, 20, 725-731.
- MacLeod, A., Mathews, A., & Tata, P. (1986). Attentional bias in emotional disorders. *Journal of Abnormal Psychology*, 95, 15-20.
- MacLeod, C., Soong, L. Y., Rutherford, E., & Campbell, L. W. (2007). Internet-delivered assessment and manipulation of anxiety-linked attentional bias: Validation of a free-access attentional probe software package. *Behavior Research Methods*, 39, 533-538.
- Mathews, A. (1990). Why worry? The cognitive function of anxiety. *Behaviour Research and Therapy*, 28, 455-468.
- Mathews, A., & MacLeod, C. (1985). Selective processing of threat cues in anxiety states. *Behaviour Research and Therapy*, 23, 563-569.
- 松下 達彦 (2011). 日本語を読むための語彙データベース (VDRJ) Ver. 1.11 (研究用) 松下

言語学習ラボ Retrieved from <http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/index.html> (2018年5月20日)

McArdle, S. (2010). Exploring domain-specific perfectionism. *Journal of Personality*, 78, 493-508.

Mischel, W. (1968). *Personality and assessment*. NY: Psychology Press.

Mitchelson, J. K., & Burns, L. R. (1998). Career mothers and perfectionism: Stress at work and at home. *Personality and Individual Differences*, 25, 477-485.

中村 敏健・守谷 順・平石 界・長谷川 寿一 (2011). ドットプローブ課題を用いた BIS/BAS尺度日本語版の構成概念妥当性の検討 パーソナリティ研究, 19, 278-280.

大谷 保和 (2010). 自己に向けられた完全主義の心理学 風間書房

大谷 佳子・桜井 茂男 (1995). 大学生における完全主義と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, 66, 41-47.

大友 和則・上野 真弓・松嶋 隆二・丹野 義彦 (2008). 高不安者における選択的注意と注意の開放の困難さ——ドット・プローブ課題を用いて パーソナリティ研究, 16, 253-255.

Osorio, L. C., Cohen, M., Escobar, S. E., Salkowski-Bartlett, A., & Compton, R. J. (2003). Selective attention to stressful distracters: Effects of neuroticism and gender. *Personality and Individual Differences*, 34, 831-844.

Pacht, A. R. (1984). Reflections on perfectionism. *American Psychologist*, 39, 386-390.

Posner, M. I. (1980). Orienting of attention. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 32, 3-25.

Posner, M. I., & Petersen, S. E. (1990) The attention system of the human brain. *Annual Review of Neuroscience*, 13, 25-42.

Quadland, M. C. (1980). Private self-consciousness, attribution of responsibility, and perfectionistic thinking in secondary erectile dysfunction. *Journal of Sexual and Marital Therapy*, 6, 47-55.

Rudaizky, D., Basanovic, J., & MacLeod, C. (2014). Biased attentional engagement with, and disengagement from, negative information: Independent cognitive pathways to anxiety vulnerability? *Cognition and Emotion*, 28, 245-249.

Ruiter, C., & Brosschot, J. F. (1994). The emotional stroop interference effect in anxiety: Attentional bias or cognitive avoidance? *Behaviour Research and Therapy*, 32, 315-319.

Saboonchi, F., & Lundh, L. G. (1999). State perfectionism and its relation to trait perfectionism, type

- of situation, priming and being observed. *Scandinavian Journal of Behavior Therapy*, 28, 154-166.
- 齋藤 路子・沢崎 達夫・今野 裕之 (2008). 完全主義と帰属スタイルおよび抑うつとの関連の検討 目白大学心理学研究, 4, 101-109.
- 桜井 茂男・大谷 佳子 (1997). “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, 68, 179-186.
- Schaefer, J. A., & Moos, R. H. (1992) Life crisis and personal growth. In B. N. Carpenter (Ed.), *Personal coping: Theory, research, and application* (pp. 149-170). Westport, CT: Praeger.
- Seligman, M. E. P., & Maier, S. F. (1967). Failure to escape traumatic shock. *Journal of Experimental Psychology*, 74, 1-9.
- Shafran, R., Cooper, Z., & Fairburn, C. G. (2002). Clinical perfectionism: a cognitive-behavioural analysis. *Behaviour Research and Therapy*, 40, 773-791.
- 清水 光栄・古井 景 (2004). 職域における抑うつと完全主義との関係について 産業衛生学雑誌, 46, 173-180.
- 新村 出編 (2018). 広辞苑 第7版 岩波書店
- Straub, J. H. (1987). An eclectic counseling approach to the treatment of panics. *Journal of Integrative and Eclectic Psychotherapy*, 6, 434-449.
- Stroop, J. R. (1935). Studies of interference in serial verbal reactions. *Journal of Experimental Psychology*, 28, 643-662.
- 田島 ますみ・佐藤 尚子・橋本 美香・松下 達彦・笹尾 洋介 (2016). 日本人大学生の日本語語彙量測定を試み 中央学院大学人間・自然論叢, 41, 3-20.
- 上枝 加乃・宮前 義和 (2010). 認知・行動・情動的側面に着目した社会的スキル尺度の作成 香川大学教育実践総合研究, 20, 125-133.
- 氏家 達夫・高濱 裕子 (1994). 3人の母親：その適応過程についての追跡的研究 発達心理学研究, 5, 123-136.
- 梅本 堯夫・森川 弥寿雄・伊吹 昌夫 (1955). 清音2字音節の無連想価及び有意味度 心理学研究, 26, 148-155.
- Wells, A., & Matthews, G. (1994). *Attention and emotion: A clinical perspective*. Hove: Lawrence Erlbaum.
- 山口 翼 (編著) (2003). 日本語大シソーラス：類語検索大辞典 大修館書店

矢澤 美香子・金築 優・根建 金男 (2013). 青年女子のダイエットにおける完全主義的自己  
陳述尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討 パーソナリティ研究, 21, 216-230.



## 関連文献

本論文に関連する学術論文と学会発表の一覧を以下に示す。本論文は、以下の学術論文および学会発表をもとに大幅に加筆修正を行ったものである。

### 学術論文

- 坪田 祐基・石井 秀宗 (2018). 完全主義と選択的注意における定位バイアス・解放困難バイアスとの関連 心理学研究 Advance online publication. doi.org/10.4992/jjpsy.90.17064
- 坪田 祐基・石井 秀宗 (2017). 完全主義と選択的注意の関連の検討—ドット・プローブ課題を用いて— パーソナリティ研究, 26, 49-60.
- 坪田 祐基・石井 秀宗・野口 裕之 (2016). ドット・プローブ課題を用いた完全主義と選択的注意との関連の検討—対人場面完全主義関連語を用いて— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 63, 47-56.

### 学会発表

- 坪田 祐基 (2017). 完全主義と選択的注意における定位・解放困難バイアスとの関連—修正ドット・プローブ課題を用いて— 日本パーソナリティ心理学会第 26 回大会, 東北文教大学
- 坪田 祐基・石井 秀宗 (2016). 完全主義と対人場面関連語への選択的注意の関連—ドット・プローブ課題を用いて— 日本パーソナリティ心理学会第 25 回大会, 関西大学
- Tsubota, Y. (2014). The relationships between perfectionism and selective attention: An experimental examination using the dot-probe task. The 16th International Congress on Applied Psychology. Paris, France.
- 坪田 祐基 (2014). 完全主義と選択的注意との関連—ドット・プローブ課題を用いて— 日本発達心理学会第 25 回大会, 京都大学

## 謝辞

本論文の執筆にあたって、多くの方のご指導とお力添えをいただきました。ここに深くお礼を申し上げます。

指導教員である石井秀宗先生には、学部の卒業論文から、8年間のご指導をいただきました。研究について右も左も分からない状態であった私に、データの取り扱いをはじめとし、研究の方法論や文章の書き方、査読への対応など、懇切丁寧なご指導を賜りました。上手く研究に取り組めなかった時期もありましたが、石井先生のお言葉によって奮起し、博士論文を完成させることができました。学生の自主性を尊重し、様々な領域の勉強を勧めてくださる先生のご指導は、私の研究者としての今後の指針ともなります。ありがとうございました。

野口裕之先生には、博士後期課程2年生から、先生が退官されるまでの2年間、指導生としてお世話になりました。大学院の授業でも、毎学期必ず受講させていただき、項目応答理論をはじめとした測定の考え方について、勉強させていただきました。お陰様で、測定についてしっかりと考えることのできる下地を構築することができたと感じております。ありがとうございました。

金子一史先生、溝川藍先生には、博士論文の副査を担当していただきました。「適応とはなにか」といった根源的な問題や、関連領域における位置づけ、データの解釈、論理的なつながりなど、様々な角度から研究についての問いやコメントをいただきました。改めて、本論文の意義や今後の研究の指針について考え直す機会を得られました。ありがとうございました。

名古屋大学大学院教育発達科学研究科の先生方には、授業や研究室に伺った際に様々な知識や刺激、研究についてのアイデアをいただきました。特に、氏家達夫先生（現所属：放送大学）には、博士前期課程1年生の終わりに、本論文のテーマである「完全主義と選択的注意バイアスとの関連」について研究をするきっかけとなるご助言をいただきました。また、清河幸子先生には、はじめて実験室実験を行う際にご助言をいただきました。実験参加者の募集や、実験室の手配などについても、何度も相談に乗っていただきました。ありがとうございました。

村上隆先生、行廣隆次先生、谷伊織先生、伊藤大幸先生、安永和央先生、平島太郎先生とは、月に1度の研究会で、主に統計や分析について、勉強させていただきました。最新の統計手法から、古くて新しい分析手法まで、様々な手法に触れることができました。国際学会や

合宿などもご一緒でき、とても知的で刺激に満ちた大学院生活を送ることができました。ありがとうございました。

名古屋大学大学院教育発達科学研究科の先輩、同期、後輩の方々、特に、大久保諒さん、解良優基さん、玉井颯一さん、二村郁美さん、寺尾尚大さんには、研究についてご助言をいただくとともに、研究に関する議論や、将来についてのことや何気ない会話を通し、お互いに刺激を受け、切磋琢磨することができたと思います。ありがとうございました。

最後に、福井から応援してくれた家族と、最も身近な研究者であり、いつも支えてくれた妻、オキシトシン分泌に多大な貢献をしてくれた愛犬のこむぎに心から感謝します。ありがとうございました。

平成 31 年 2 月

坪田 祐基